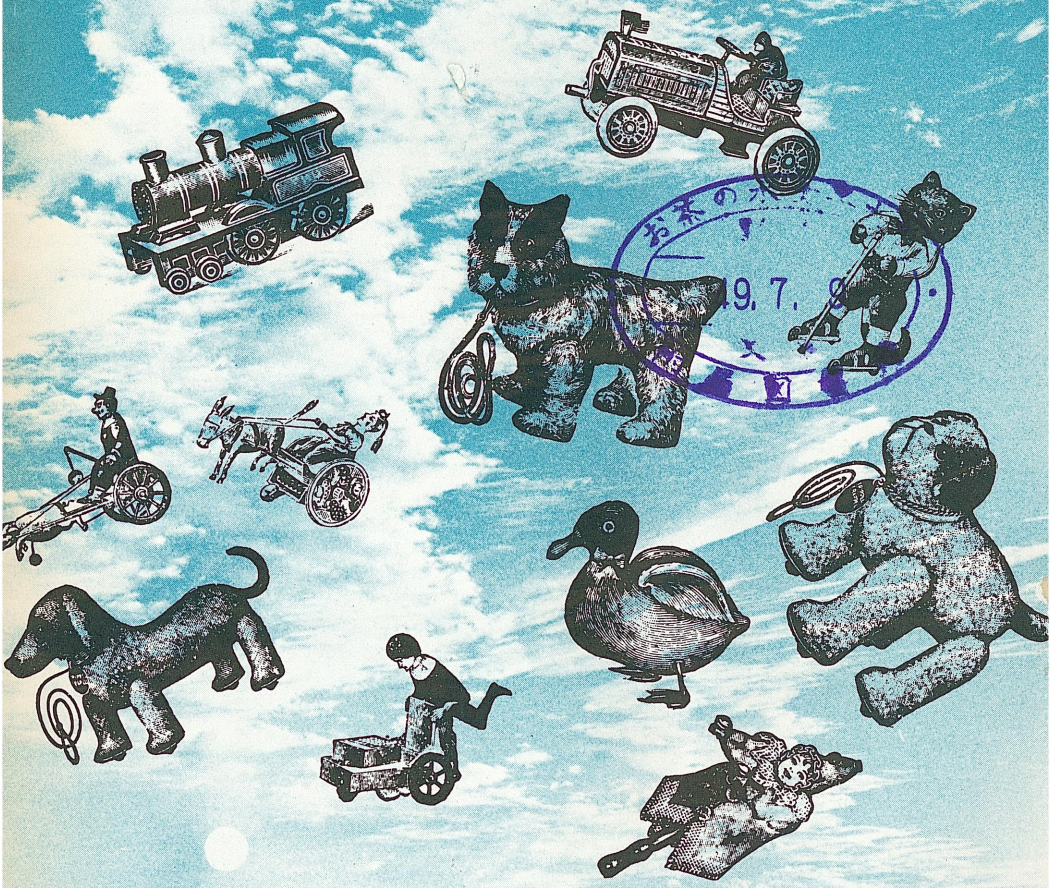
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



お茶の水 49.7.

8

第七十三巻　第七号　日本幼稚園協会

より豊かな幼児教育を

新刊書

子どもにとって園生活とはなにか

佐治守夫・大場幸夫編著

問題行動をめぐる愛情あるユニークな事例研究の書

B5判・192頁・1,200円

保育ニードの地域性

保育学年報1974年版　日本保育学会編

B5判・246頁・3,300円

保育および保育学に関するその年度の動きをもれなく収録。学会における研究発表・遊具・絵本などの幼児文化財・保育関係図書目録・保育行政の動きなど価値ある資料を満載。

1962年版	147頁	600円		1969年版	328頁 3,500円
1963年版	316頁	1,200円		1970年版	284頁 4,500円
1964年版	280頁	1,800円			
1965年版	230頁	1,700円		1971・1972年版	248頁 2,000円（絶版）
1966年版	245頁	2,200円		これからの保育内容	
1967年版	256頁	2,300円（絶版）		1973年版	252頁 2,800円
1968年版	310頁	3,000円（絶版）		園保育と家庭	

日本幼児保育史（全6巻）

日本保育学会著

日本保育学会の共同研究。全国的に貴重な資料を集録。日本で初めて大成された書です。

第1巻	江戸時代～明治前期	256頁 1,200円		第4巻	昭和前期 336頁 1,400円
第2巻	明治後期	304頁 1,000円		第5巻	昭和18年～昭和20年 312頁 2,800円
第3巻	大正期	350頁 1,500円		第6巻	終戦直後期～昭和23年（近刊）

近刊！

幼稚園参考書 ―その教育と運営―

東京都私立幼稚園協会編纂

日本私立幼稚園連合会刊行

幼稚園教育と運営に関する指導書です

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課(03)292－7781(代) にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十三巻　第八号

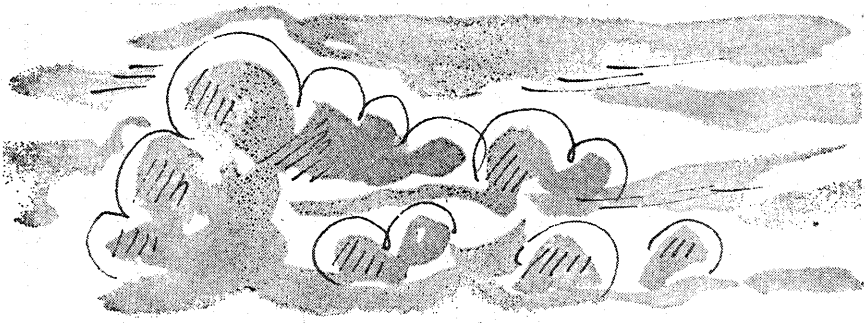
幼児の教育　目次

——第七十三巻　八月号——

表紙　司　修
カット　中島英子

©1974
日本幼稚園協会

幼児教育の原点……新井清三郎…(4)
☆対談……周郷　博…(10)
服部公一
夏休みを考える
——沈黙と空白の意味——……本田和子…(25)
海辺にて……河井祥子…(30)

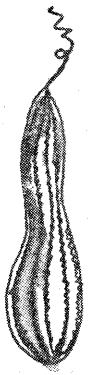


☆講演

家庭教育を見直す……牛島義友…(33)
洋書紹介……江波諄子…(39)
出会い……赤間峰子…(44)
〝幼児ののぞましい言語指導はどうすればよいか〟より
子どもの表現―感じたこと・考えたこと・ことばで表わすこと―
大津市立大津幼稚園…(48)
橋詰良一著
「家なき幼稚園の主張と実際」より……(56)

幼児教育の原点

新井清三郎



幼児を教育するとは一体どういうことなのだろうか。まず幼児という人生の芽生えの時期を相手にしていることを考えると、素質と環境の要因とを比較したときに、どちらに重点をおくべきなのだろうか。能力とか可能性とかいうものを幼児の時期に見きわめたり、さらにそれをのばすことがどの程度までできるのだろうか。それができたように思っているけれども、長い将来にわたってはじめてわかることであったり、われわれがひとりよがりに決めてしまっていることがないだろうか。また視点をかえてみるならば、われわれ自身の幼児を見る目がくもっていたり、偏っていたりして、たとえ一般的に認められた教育のうえに立って教育しているつもりでありながら、考え方そのものを見直してみる必要がおこりはしないだろうか。

これらの素朴な疑問を、幼児教育に携わっている人々は、おりにふれていだくことであろうが、日常の忙しい保育活動にとりまぎれて、すぐ消え去ってしまっていることもあろう。

以上のような問題点をふまえたうえで、次のようなことを考えてみたい。

まず性格形成および性格の構造について簡単にふれ、つぎに性格の基盤となっている気質・体質の傾向について、さらに個体発生および系統発生からみた神経系の成熟・発

達についてのべる。次に視点をかえて、幼児を見る見かた、または子どもの行動を評価する立場に立って、なにが「よりよい」「より本質的な」教育なのだろうか、いいかえれば「よい」子どもとは何をわれわれがさしていっているのか、という評価の視点について反省してみることにする。

性格とか個性とか、パーソナリティとは何をさしていっているのであろうか。心理学や精神医学の学説をひくまでもなく、人間の存在が未知であり、多様であることは、いいかえれば、性格の複雑でとらえどころのないことにあらわれている。このようなデリケートな主題を簡単にのべること自体無理であるかもしれない。しかし、一方割切って単純化した形であらわすことによって、問題点を多少とも明らかにし得るかもしれない。このような前提で述べることをまずおことわりしておく。

「ひとりひとりを大切にする」ということがよくいわれる。ふりかえってみると、このいいかたはずいぶん変だな……と感ずる。大体幼児を教育する時に、ひとりひとりの特徴を意識しないで保育ができるだろうか。またその特徴を尊重しないでひと時も教育ができるはずがない。しかし、またそうであるだけ、平凡なこのことを毎日の保育で実行することがむずかしいし、くりかえしいわれることなのだろう。はじめの「ひとりひとり」とはいいかえれば個性であり、素質であり、また長い世代にわたってひきついできた遺伝的なものの総和であると考えられる。また「大切にする」とは、理解し尊重するという面があるとともに、大切にしたつもりでありながら、保育者の一方的なおしつけや、思いあがりや、独断、偏見さえ加わっているかもしれない。このように考えると、一方では子どもというものを客観的にみるという点と同時に、子どもを見るわれわれの側の見方そのものとに光を当てて、普通何げなしに受取っている保育の態度そのものをふりかえってみる必要があろう。

(1) 子どもの性格構造

性格というものを建築物にたとえてみよう。おもてには現われないけれども、土の下にしっかりと根を張った地盤になるものが、あるはずである。すなわちこれを遺伝的な資源といえる。しかし父親からうけついだ染色体のなかに

数万とある多数の遺伝子およびその組合せは、必ずしも完全なものではない。むしろいろいろな偏りや欠陥が部分的にあるほうが普通であろう。完全という目でみると、むしろ完ぺきな遺伝資質を受け継いだ子どもなどは特殊な例外に限られてしまうかもしれない。音楽の才能、数学的、学術的な才能などは何といっても遺伝的にうけついだ資質であろうが、同じ子どものなかに特殊な才能と、性格的な欠陥という点での遺伝的偏りが同居していることを保証できない。この遺伝的基礎構築の土台のうえに、体質や素質の特性が与えられる。

「生れつき……」のことばには必ずしも狭い意味の遺伝だけでなく、受胎後の個体の発生期間をふくめて、出生の関門をくぐりぬけてきた個体のもっているある運命的な道すじを示している。どのような生活環境が与えられたとしても一生持ちつづける自律神経系の特質とか、体質傾向とか、体型の特徴などは、この問題に関係している。またこのような体質、素質的な傾向と平行して、気質の特徴が現われてくる。たとえば陽気だとか、お天気やであるとか、ユーモラスで楽天的だとかいうような気質は、かなり体質的に規定されているものであり、シェルドンやレッチュマーなどの学者が昔から指摘している通りである。

デリケートで感受性の強い、慎重で神経質であるというような気質傾向と、きゃしゃで敏感で、時によるとアレルギー体質や自律神経の不安定傾向を伴ったものを脳神経型（発生学の方面から外胚葉型）といったり、その反対のあけっぴろげで、大らかな、感受性の鋭くない気質傾向と、肥満した、睡眠、食事などの点でも問題の少ない子どもを内ぞう型（内胚葉型）といったり、またそのいずれとも多少異なった、しん棒強い、粘着性の、物にこだわることの多い、筋肉質の気質、体質傾向をもったものを筋肉運動型（中胚葉型）というようにいって分類しているのはシェルドンである。このような比較的簡単な類型化をしてしまうこと自体問題であって、生きた子どもたちは決してこのように簡単な動かない類型に分けられるものでないことはわかりきったことであるが、他方で、やはりこのような区分けをすることによって保育の方針をたてるうえでひとつの目安となることも否定できない。

(2) 脳の成熟

前にのべた気質、素質の基礎のひとつに脳の成熟のこと

がある。脳（中枢神経系統）は受精卵が分割、分化して組織ができてくるいわゆる個体発生の方面と、他方数十万年以前にさかのぼることのできる霊長類の発達段階でしだいに進歩してきた、いわゆる系統発生の方面とがある。たとえば、ホモ・ファーベル（材料をあやつることのできるということが人類の特質のひとつであるという）という面からみれば、大脳の頭頂葉（ローランド氏溝のそばの大脳皮質の部分）の神経細胞および神経線維の髄鞘化は、すでに生後数ヵ月で徐々に進行してくることは、幼児の行動の発達が生得的に備わった能力にある脳の部位が対応していることを示しているし、また総合的な判断や、善悪の判断や、意志の力などに関与している機能は、大脳の前頭葉やその下方にある嗅脳の部位に関係があるといわれている。

すなわち行動、情緒、意志などの発達は多分に大脳の各部位および、それらをむすびつける聯合領の成熟に対応していることが知られている。これらは個体の成熟に関する個体発生の面であるとするならば、脳の他の部位、すなわちより原始的な発達段階にある哺乳動物でも、基本的には同じ構造と機能を持っている脳幹部、視床下部などの、体質や自律神経機能に関係の深い部位の成熟は系統発生の面をあらわしているわけで、数万年前の人類と本質的には異なっていない。ネアンデルタール人、クロ・マニヨン人、ペキン原人など、人類の発展をさかのぼると一万年に足らない期間に急激に発達し、現代社会に適応してきた大脳の発達に対して、現代人が、古代の人類と大差のない感情、情緒の発達に止まっていることを示唆しているわけである。このことは幼児の保育が一方では人生の芽生えの時期に、その成熟段階に即したしつけにむけられるべきであるとともに、他方では元来人類が現代でも保持している原始的な性情を肯定して進められるべきであることをも、ともに示している。

(3) 教育の可能性

前にのべたことだけでは人間の資質・素質・性格の基盤はすでに出生時にきめられていて、教育による個性の成長はごく限られてしまっているように誤解しかねないことになる。はたしてそうだろうか。遺伝といい、脳の成熟といっても、それはあくまで性格の基礎構築の一部を示したものであるにすぎない。問題はむしろその上につくられる骨組みの構造・内装・インテリアーなどである。すなわち気

質をよくも悪しくも、どの方向にのばしていけるかということは、すべて幼い時期の人間関係、しつけ、生活指導を通して、他人・保育者・親の指導、およびそれらを子どもが心のなかで受け入れていく過程で養われていく。ただその教育の仕方、個々の子どもに対するアプローチには、上述の基盤が厳として存在し、限界を設けていることは否定できない。したがって個々の子どもをみる目は、ある年齢の平均的な子どもの像に対するだけでなく、十人十色の子どもの特性に対して同時に注がれねばならない。

(4) 子どもを見る目

そこで、「子どもを見る目」がくもっているかどうかが重要なことになる。われわれがこんな子どもに育てたいという願いをもって子どもに接するときに、無意識にさまざまな気持ちがそこに働いていることに気付く。そこでどんなものがあるかを考えてみよう。

a　普通という意味での平均概念

行動・動作の点であまり極端でないもの、すなわち、あまり乱暴でもないし、あまり引込思案でもないという意味で、なるべく普通の子どものイメージをもって子どもに接しているわけであるが、このいわゆる平均的な像からずれていると、事の当否はさておき、やはり集団の保育では問題にせざるをえない。しかし、「普通」でない行動がすなわち異常であると簡単にきめてしまうわけにはいかないし、またそれらをかならずしも治さねばならないともかぎらない。

b　困った行動という意味での適応概念

集団保育では、一般的にいって、非社会的な、おとなしすぎるほうが、積極的・活動的すぎて問題をおこす場合に比して、目立たないし、つい見過しがちになる。しかしこの両者の行動を比較してみるとむしろ他人を困らすことの少ない子どもたちのほうが、より重大な問題をはらんでいることが多い。

c　病的という意味での疾病概念

「自閉症」とか「緘黙症」とか「神経症」というようなことばが割合気軽に用いられる。この場合、ある疾病という意味で小児科・精神科で医学用語として用いられる場合とは多分にニュアンスが異なり、むしろ単にある行動や動作の偏った状態を指していっているようであるが、元来疾病とは原因・症状・診断・治療・予防という一連のつながり

のなかで、かなり厳密に定義されるべきものであり、あまりルーズにこれらの用語を用いることは、保育態度を混乱させる意味でも望ましくない。しかし、それにしても、自閉的・神経症的な行動になると、本当に病的なものとして治療の対象とすべきか、単なる一時的な行動の特徴として問題にしないほうがよいのか迷うことが少なくない。疑わしい時に専門医に相談することは当然であるが、同時にそれによって、子どもに教育者・保育者として接することをやめてしまうことは、子どもにとって決してよいことではない。

d　可能性を認める意味での発達概念

子どもののびていく姿はまことに多様・多彩である。三歳児の反抗は四歳児の従順に、五歳児の積極性に、さらに六歳児の規則正しいことを好むという傾向に変化していく。その時々の年齢特徴と、個人差をみつめる時に、まさに保育者の目が開かれるおもいをすることがあろう。ひとりの行動発達の特徴は、前述した素質的・遺伝的特徴と表裏一体をなして、めまぐるしく変貌していく。しかし、五年・十年とみていくと、その個人にとって最も適した道を子ども自身がえらんで進んでいったのだということがわかる。個々の子どもの成長の能力はそれほどすばらしい。その道すじをゆがめることのないように、消極的に見るよりも、より積極的な面に目を注いで、いたずらに気づかいと過保護によって神経質的な傾向を助長しないように心がけることは、保育者の務めであるとともに、そのような姿勢がとれるかどうかは、むしろ保育者自身の人間としての生き方にかかわってくるであろう。

（静岡大学教育学部）

❖対談❖

周郷博
服部公一

☆はじめに

周郷　服部さんていうのは、どういう、どういうったってぼくの頭の中にあるタイプしかないわけだけれど……どういう音楽家なのか、失礼だけれど、仰々しくいえば業績、について知らないんですよ。なんか、さとうよしみの歌の作曲があるんですって？

服部　アイスクリームの歌、なんかそうです。

子どもの歌っていうのは……そうですね、別に子どもの歌作るっていうことに使命感をもって作ったわけじゃないんです。作り始めたわけでもないんです。

周郷　そういう言葉、ぼく好きなんだけど……。

服部　やってる内にね、これは割に大事なことなんだなあ、っていう気はしてきましたがね。

周郷　ぼくは、子どもの専門やっていうのはいやなの。ぼくは教育の専門やっていうのもいやです。これはもう、教育が商売になっちゃってるんだから。何か自分のために教育を利用してるでしょう？　そして口だけうまいことをいってます。やっぱり何かのはずみに、教育とか児童とか幼児とかっていう、専門ではない人がヒョッと気がつく、そこで新しいものが生み出される可能性があるんです。

服部　子どものもの、っていうと、〝お子さまランチ〟っていう言葉がよくあるんだけれど、あれは、料理人が必死になって作っているランチではないですね。旗なんぞ立てることによってごまかして、トマトケチャップなんかでピンク色にしたりして……。

周郷　そうそう、だましてるわけですよ。

服部　あれはね、誰が見ても簡単に作れるんです。だから、おれはきれいなお子さまランチでも作ってやろうなんて思う人がいないともかぎらないけれど……。（笑い）ところが、お子さまランチっていうものが、本当に子どもにとって必要なものなら、それに一生をかけるのもけっこうでしょうけれど、ぼくの考え方からいくとあれ、なくてもいいものでね。

周郷　なくてもいいもんですねー。

服部　カレーライスっていうのはね、あれはやっぱり、今みたいに〝カレーライスが、即たべたいな〟なんてことじゃ困るけれど、カレーっていうのは、本来南の、暑いところの人が食生活を維持するために考えた、大変命がけの作品でね。あれは本物になりうると思うんで、カレーは追求してもいいけれど、お子さまランチは追求してもしょうがないんじゃないか、と思うんですよ。

周郷　今の話は、雑談みたいだけど、重要なことだな。

教育っていうこと、本当にぼく、教育って考えただけでもいやなの。幼児教育なんかやってますなんて……お子さまランチのたぐいだなあ。（笑い）センチメンタルで……。センチメンタルならば、人間だから当然あってもいいんですけれど、そのセンチメンタルが、ちょっと、変なセンチメンタルなの。センチメンタルが善人であるような……。

☆　おやじ

服部　私の原体験みたいな、おかしな話があるんですけれどね。私の両親は私の小さいころに離婚しちゃったんです。そしてぼくは祖父母のところに預けられたんですが、ある時うちのおやじが後妻をもらいまして、ぼくを引き取ったわけです。そしたらその後妻さんが病気になっちゃって、結局は死んだんですが、その時に病気のせいか、彼女はヒステリーみたいになっちゃったんです。そして、ぼくのことが、何だか頭にくるんでね。

周郷　ああ、ヒステリーになったからね。

服部　それで、はさみで、着てる洋服の上から下まで全部切られちゃったりしてね。何であんなことしたのか……ぼくが五歳の時です。

その時にね、おやじがぼくのことを抱いて、ま、危いから逃げるわけです。それで毛布にくるまれて、おやじが抱いて逃げてくれた、それが、私の一番最初ぐらいの思い出なんです、おやじの。おやじっていうのはそれから以後、何もしてくれなかったんですけどね。ぼくのおやじ、この間、二月に死んだんですけれどぼくの四十何年の生涯の内、おやじと一

緒に暮したのはのべにして一年もないんですが、その中のある一日っていうか一晩ていうのがそれなんです。

それが何か、おやじっていうもののもっている意義、というか、おやじというものが息子に対してもつ、つまり外敵から息子を守る、ということ、なるほどおやじっていうのはこういうものなんだな、と思ったことがぼくの一生を支配していくような気がしましたね。

しかし、考えてみるとね、おやじもその時は本気だったような気がするんです。

周郷　そうですね、そりゃわかります。

服部　ものすごく本気だったと思うんです。三十ぐらいですよ、三十二、三です。そしてどうしようもなくて、ぼくの目の前でその女の人をはり倒したんです。

結局ぼくは、このことだけで一生おやじを評価していくんだと思います。

後年そのおやじが大変な恋愛をいたしましてね、ぼくが十六、七のころです。

うちのおやじは上野の美術学校を出まして彫刻家だったんですがね、その時は、さっきの話の人が死んで三番目の奥さんをもらったわけです。先生と同じぐらいかな、先生明治四十年ですか？

周郷　四十年です、じゃあ、ぼくが一高にいたころ、上野にいたわけだなあ。

服部　ぼくはその三番目の人っていうのは、おやじの奥さんだということはもうわかっていましたが、あまりいかさないなあと思ってました。一緒にいなかったせいもあって……。

周郷　ああそう、一緒にいなかったのね。

服部　戦争中でしたし、二度目の奥さんが死んじゃってからは、祖父母もぼくをおやじのところへ帰そうなんて思わなかったんです。

ところがある日ぼくが東京へ出てきたら、おやじが家にいないんです。それで奥さんつまり三番目の奥さんに頼まれて、当時おやじは彫刻家じゃ食べられないもんで共立女子大につとめてたんですが、その、共立講堂の前で、ぼくはおやじをまってたわけです。山形中学の三年でしたよ。正月で寒いのに立ってまってたんです。そしたらおやじがきまして、ぼくも一応、おやじを責めたんです。ぼくがあんまりがんがんいうもんでおやじも困って、何だか一〇〇円ぐらい金くれましてね、その辺行って何か食ってまた昼ごろ出直して来いっていうんですよ。ところがね、大変なんですよ、朝八時ごろめし食いに行くっていうのは……。駿河台の方まで行きましてね、明治大学の横町あたりでめし食って、四時間ぐらいつぶしてから行きました。

結論から先にいうとね。彼は夕方、彼のかくれ家へ連れて行ったんですよ。そしたらそこに女の人がいるんです。ぼく、不思議なんだけど、すっかりその人が気に入っちゃってね。とうとう本当のことを三番目の人にはいいませんでした。

しかしその辺おやじも老獪でね、ぼくは音楽少年でしたから、次の日、日本で終戦後初めてオペラがあったんです。藤原歌劇団がやった「ドン・ジョバンニ」です。その切符かなんか買ってくれて……。

周郷　お父さんが？

服部　えゝ。それで、行こうっていって、行ったら〝おれは用事ができたから先に帰る〟っていっておやじの恋人と二人で行かされちゃったんです。

周郷　ああそう、おもしろいね。

服部　それからいろんなことがあってぼくは山形へ帰っちゃってそれきり東京へ出て来なかったんです。ぼくはその時、おやじのことをそれほど許してもいなかったけれど、何か、あの女の人の方がいいような気がしたんです。おやじは結局その人とは結婚しませんでしたが、そのころ、その女の人が二十六、七、おやじは四十ちょっとでした。

あれは、ちょっとよかったと思いますね。何か、甘ずっぱいような気持ちで、おやじの恋人とデートなんかして……。

周郷　ヒステリーになった人よりその人の方が……魅力感じたと思うな。十六、七だったらそうだと思います。

服部　それともう一つは、私の本当の母の問題じゃないからでしょうね。

周郷　そうそう、たしかにそうだ。公平に見られるわけだ。

服部　もっともそれでぼくは大分損をしましたがね。ぼくがおやじの愛人の側についたということで……。家庭的には、

周郷　時代が時代だしね。

服部　だから、女と男っていうのは、ある意味ではすごい戦いで、緊張をゆるめて〝私はかみさんでございゞ〟なんていってると、男っていうのはいつでも裏切るもんですね。

周郷　そうだと思うよ。

服部　しかし、非常におかしいと思うのは、おやじがしたと同じようなことをぼくがしてるのね、今。

周郷　そりゃあ、文学作品なんかのテーマにも見られるように、なんとなく、気がついてみると同じようなことやってるっていうのはよくありますよ。

しかし、全然おんなじ、というんじゃないんだな。

服部　ただその時私がおやじについて思ってたのはね。〝こんなくらしをする

人が、どうして子どもなんかを作ったんだろう〟ということです。

周郷　それは十六、七の時？

服部　えゝ。

周郷　ぼくもね。ぼくは実におとなしい子どもだったって、もうなくなりましたけれど小学校の時の先生がいいましたけどね。やっぱり十六、七のころはそういうことを考えましたね。父親と母親は何のために、能もないのにこんな結婚なんかして……と思ったよ。

服部　それで、親の因果が子に報い……みたいなもので、ぼくが子どもを作らないのは、そういうことですね。子どもは非常に好きなんですけれどね。やっぱりそういうかげというか、刻印というか、それはかなりおやじたちの生活がぼくに押してくれたような気がします。だから先生がおっしゃったように、親と同じようなことをしてても、全く同じじゃあないんです。形としては同じなんですけれど、実質は違うんです。

周郷　今、男と女、恋愛と結婚みたいな話になりましたけれど、今の日本の女の人たちが考えなきゃならないことがいっぱいあるんじゃないの？　男っていうのは子どもができちゃうと、しょうがないから、いやでも、何か心は離れちゃってるんだけれども、家庭のビジネスだけでつきあってるっていうことが、かなり多いですね。女が何か図にのってるといけないんじゃないかと思うの。

今、服部さんがいったように、やっぱり緊張っていうものがあってね、そういう緊張の中で男も女も成長するんだと思います。

服部　ぼくは、この辺から今日の本題に入るといいと思うんだけど……。

周郷　いや、今までのもなかなかいいよ。（笑い）

服部　ほんものの人間のたたずまいみたいなものを見せるということが、教育だっていうことね。

周郷　そう。ぼくは、お父さんが五歳の服部さんを毛布にくるんで、守って、病気の奥さんをぶんなぐった、そういうことが、服部さんが今こうして、この年齢で、単に父親像だけではなく、人生っていうものをごまかしなく見ようとしてる……もとになったんじゃないかな。

ぼくは服部さんのことをあまりよく知ってる、理解してるところは少ないんですけれど、この前お目にかかった時なんかでも、本当に何かこう、作曲家とか音楽家とかいうのは、裏表なんか使いわけることはできませんからね、一般にそうかもしれませんけれど、かくしごとがない、一人の人間として全部を出している人だと思いました。日本人がしばしばやるように、ちょっとよく見せようなんて

ことが全然ないでしょ？

服部　いや、そりゃあ、ちょっと……

（笑い）

周郷　全然ない、といってしまっちゃちょっとほめすぎちゃってるけど……。

服部　ぼくが、先生の今おっしゃったことに付言すればね。おやじがぼくを守ってくれた原体験と、おやじが自分の恥部みたいなものを自分の恋愛ということでぼくにさらけ出したというその二つ、片方はイエスの姿であり、片方はノーの姿であるわけです。そのイエスの姿とノーの姿で、はだかを皆ぼくに見せてくれたということが、ぼくにとってかなり意味があった、ということがいいたいんです。

周郷　もうちょっとつけ加えるとね。それから、常套的な言葉になるけれどね、人間の真実の姿、緊張してる状態でしょ？　どっちも。恥部を見せてるっていってもいい加減じゃない、そこがぼくはよかったと思うんです。

服部　恥部っていっても、ぼくが一番いやだと思うのは、女がよくいう〝男ってみんなこんなものよ〟とか……。

周郷　観念的なんだなあ。

服部　そう、観念的に、安い観念論みたいに見せるのと違うんです。そうじゃなくて、子どもっていうのは、本当のところを親に見せられるとガクッとくるんです。

周郷　またぼく、余計なことをいいそうだけど、本当のものっていうのはね、今の〝男ってこんなものよ〟なんて、そういう観念的な言葉ではいえないものです。それを、小さい時に体験しているかどうかですね。

☆　school

服部　今日は、芸術の話をすることを期待していらっしゃるようだけど、ちょっと変な方にそれちゃいましたね。

周郷　その中で、特別に芸術の話をしなくても芸術の話にはなるんですよ。

服部　あのね。〝アンチョコ〟っていうのは、ぼくは人間の生活の中には、絶対ないと思います。ハンドブックっていうのはないんです。

だから、〝お母さんらしくしましょう〟〝あなたは人の親じゃないですか〟〝教育者じゃないですか〟とかっていうようなことより結果としておやじであり、結果として奥さんであり、結果として先生であるのであって、その前に一人の女であり男であり、（まあ社会的存在という意味も含めてですよ）そういうもので本気で生きている存在であるということが、何よりも子どもにとって一番いい教育である、ということです。

schola っていうのは、ある時に誰か、

schola 的なことを始めたやつが悪いのであって schola なんていうのがない、もっと前から教育はあるわけでしょ？

周郷　学校っていうものね。ゆとりという意味のラテン語ですよね、本来は。

服部　その schola が school になっちゃったわけですけど……、ところが school っていう言葉にもう一つ category に近い意味もあるんです。グループとか派とかやり方とか……。今の学校は、どっちかというとなんとか派っていう意味で使っちゃってるな。

周郷　そうですね、派ですよ。策略の徒党です。

服部　あれはちょっとがっかりです。もっとゆとりがあって、philosopher でなくちゃいけないと思うんだけど……。

周郷　そうです。今メキシコにいるイワン・イリーチなんかでも、〝学校のない社会〟っていう本があるのは、やっぱり学校っていうのは school という意味で、どの徒党に属するか、結局、企業家とか政治家とか、ロシヤでいえば、ロシヤの政治上の指導者の手段にしか使われないわけです。

服部　そうですね。学校っていうのはあれ、科学でもなければ、philosophy でもなければ何でもないんですよ。何かっていうと政治です。

周郷　イリーチもいってます。病院、教会、学校、この三つが彼の頭の中にあるわけです。教会っていうのは何か、schola 党派になってるでしょ？　そして神はいなくなっちゃいました。病院ていうのは何か、医者の党派になっちゃったな。そして philosophy がないわけです。病院は病気を作っているところであって、治すところじゃない。学校っていうのもそれと同じような場所で、神さまはいない学校なんです。

☆　真　実

服部　ちょっと話を前にもどしますと、たとえば、〝お父さんとお母さんが夫婦げんかをしました。本当にいやらしいと思います〟〝してはいけない〟あるいはそういう姿を見せちゃいけないんだ、という必要もないと思うんです。

周郷　そりゃないね、そりゃやっぱり真実だものね

服部　そりゃ、その子たちも大きくなればやるんですよね。そこに愛情があって、緊張感があれば、けんかも、セックスでさえも肯定されると思う。

だから、教育の中でも、〝教育〟ということよりも、自分が自分の仕事を通じて社会的にバッチリ生きようというふうに人間がやることであれば、よしんば少し失敗があっても大抵通る、技術偏重みたいになって、how to teach なんていう

ことに一生懸命になるとだめなんです。

ところが、ぼくみたいなことをいうと精神主義っていうんですよ。そしてだめだっていうんです。

周郷　精神主義っていう、変ないやらしい言葉でいったんじゃだめなんです。

服部　しかし音楽の教師に関していうならば、自分がいい音楽をやろう、あるいは、自分が子どもたちと一緒にいい音楽を創り出そうとしている先生は、教え方、上手ですよ。

周郷　そりゃそうでしょうね。

服部　自分で発明し、あるいはどこかへ行って覚えてき、教育技術 how to はちゃんとどこかでもってはいるんです。口先三寸で how to だけやろうと思ってもだめなんで、むしろ、もう一つ一番いけないことは、〝幼児に音楽を教えてやろう〟なんて、とんでもない、うぬぼれもいいとこでね。ここの場において自分に与えられたオーケストラ。あるいは合唱団なりは、子どもたち十五人である、そしてぼくは彼らと同じ次元の音楽家である、ここでこの子たちと一緒に一番たのしく音楽をやるには、ここで音楽を創りあげるのはどうすることかっていうことが一番大事なことであって、それはその場における significance は how to teach なんです。その significance (重要性) なんなんていうことをこえてるわけなんだな。

周郷　でもまあ戦後、how to というのはね、幼稚園の教育とか小学校の教育の中で、ばかにはやっちゃった、だけじゃなくて、何かみんな毎日の生活も how to みたいじゃない？

服部　そうですね。

周郷　その、もとになっているのは何か、衰弱しちゃった感じですね。だから、学校制度なんかだって how to ですよ政治家の how to かもしれないの。こうやっておけば選挙に都合がいい、日教組だってこうやっておけば日教組は安泰、ということになると思うの。

☆　夫婦・男と女

周郷　時間も大分たってきましたからちょっといい残したことをいいます。

この服部さんの本の終りの方読んでましたらね、幼児教育のことが出てますね。〝歌いたがりの心万才！〟というところに、

〝就学年齢を二年下げるとか、幼児学校義務制、義務教育化するとか、いろいろな方策はたしかにあるだろうけれども、レッスンママみたいな狭い型ではなしに、おおらかな雑唱、失礼、合唱の歌声の中にそれを求めるのも効果的な方法だと思うのだが……〟

とこれ最後なんです。やっぱり何か、

〝合唱〟といっても何もみんなが同じ声で歌わなくても、個性的に違うものがあるんだけれども、そういうものが、今の教育の世界にはないですね。何か school 党派に忠実なりゃいいんですね。制度までそうなんです。しかしそうじゃなくて、ここでいま、合唱といってるものは、それを一生懸命やろうとしたら、教育はそこから生き返ってくるような気がしますよ。

服部　だからその、よく型にはめる教育がいけないっていいますね。型にはめる教育はいけないといってる先生が、教室で何をしてるかって、やっぱりしらずしらずに自分の知ってるもののなかに、子どもをとりこもうとしてるんでね。だから、いろいろそういう意味で、もっと自分が生きるということ、自分が楽しむということに本気であってほしいですね、先生たちは。ところが自分で楽しむっていうと〝じゃあ、私は今恋愛をしてます〟〝ボーリングをしてます〟っていってそっちの方ばっかり一生懸命になって学校へ行くのやめるっていう、これは違うんです。

周郷　今の服部さんのいったことはね日本人はね、生きることを楽しむ、楽しみ方を知らないんです。だから楽しむっていうと変な方へ行っちゃうのね。

服部　そうなんですね。

周郷　それもまた school になっちゃうんだ。

服部　school っていうのは、考えてみると、どうも日本の場合は、さっき先生のおっしゃった徒党みたいな派閥が多くてね。一つの school の中にいくつもの school があったりして……。派閥っていうのは人脈という意味を含めてもいいんだけど、ぼくが今いってるのは、教え方とか、そういう了見のせまいことをいってるんです。

周郷　しかもその派閥というんだって、ヨーロッパなら、デカルトとか、偉い人がいますね。そういう派閥とは違うんです。何か、移り気の、今何がはやってるかとか、今誰が権力者であるかとか、つまり、親分子分の関係しか日本にはないような気がするの。

この間も、司馬遼太郎さんがテレビでいってましたが、〝友情〟っていう言葉も、ヨーロッパから入ってきたっていうんです。

服部　そうでしょうね。

周郷　もともと日本にはなかったんだそうだ。親分、子分か、徒党しかなかったんです。〝愛〟という言葉も、ヨーロッパから、中国から入ってきたんです。

服部さんのさっきのお父さんの話ね、やっぱりお父さんと子どもなんだけれども、やっぱり〝友情〟イエスさまのいっ

てるような意味での〝友情〟というものに近いものを感じてるわけです。人間が生きてるという真実さ、ね。

服部　ただ先生、私の場合は、おやじと一緒にくらしてなかったから……お互いに客観的で、距離があったんです。

周郷　だけどね、服部さんの告白的な話、大変おもしろかったけれどね。今のお父さんが、五歳の子どもに、それだけ一生に、原体験を与えているかっていうとね。あなたは別れちゃっているのに、あなたのお父さんはあなたに生涯的な重要なものを与えたんじゃない？

服部　それは偶然、彼がいい加減な生活をしてたからじゃないですか？（笑い）

周郷　今はね、父親っていうのは、毎日いるしね。

服部　ちゃんとしすぎてるんですよ。

周郷　ちゃんとしすぎておもしろくないよ。スケールは小さいし、毎日ちゃんと帰ってきて、テレビ見てても、しょうがないね。

服部　一つの戯画的な姿を申しますと。あるところに、五歳ぐらいの子どもとお父さんがいるとします。その夫婦がある時猛烈なけんかをするわけ、で、はり倒しあったりして、あげくの果ては、しょうことなしに家に帰ってはきても口もきかない。すると物すごい tension 緊張の中に子どもはおかれているわけです。きっと身のおき場に困り、生命の危険さえ感じると思う。それが、何日かたって、夫婦が仲直りして、次の日は表情も違っちゃって夫婦が子どもの前に現われる。すると子どもは、またたびっくりすると思う。こんなことが……昨日まで敵対視していた二人がこんなに仲よくなる、それだけの situation の中で、子どもたちはずい分勉強すると思います。これは全くぼくの作り話ですけれど……。

周郷　勉強するしね、今の話きいてて思い出したんだけれど、うちの近所にけんかばかりしてる夫婦があるんです。ところがそこの家の子ども、わりにいい子なの。ただすーっと仲がいいなんていうとこの子はだめなの。

夫婦でも〝友情〟という姿で親しくできるんじゃないかな。友情っていうのはこわれないんですよ、安心なんです。

服部　友情はあきないんです。だから男と女の間でも友情とセックスのかね合いが必要なんだと思います。セックスの関係だけで安心だなと思うのは危険なことです。

だから、教育みたいなものもそうで、〝この子どもたちはぼくの弟子だ〟と思って、〝私の自由自在になる〟と思った途端に離れちゃいます。

周郷　それはもう、今のお母さんたちにいいたいことです。

ぼくは、今の日本のお母さんたちのpsychology っていうの、どういうふうに考えたらいいのかなあって思います。マイホームに入っちゃったというせいもありますけどね。昔ぼくはおやじの生まれた家なんかへ行って、嫁で今はばあさんになっちゃった人がいて、子ども心にもお嫁づとめって大変だなって思いましたけど、今では実にいいばあさんになってますよ。やっぱり女っていうのはね、嫁づとめみたいなことが必要ですよ。ヨーロッパだってそういう修行はあるんですよ。日本の人は、何の抵抗もなしに勤め人の男の人と一緒になって、幸福になろうなんて思ってる、これは間違ってるんじゃないかと思います。嫁づとめっていうものを、変な姿で肯定するわけじゃないんだけれど、なんか修行ですよね。男は社会の中で、いやおうなしに修行させられているんですからね。

服部　そうですね。ところがね、女の職業はちょっと違うんですね。男っていうのは、牡として生きると同時に、ホモ・サピエンスとして生きるということを、もうワン・チャンネルもたなきゃならないように運命づけられてますね。しかし女っていうのは、牝として生きるのと同じ次元で、一つのチャンネルに職業も一緒にのせちゃおうというんです。

だから、一番いやなのは、ピアノを教えたり技術を教える場合、かなりしぼるわけです。しぼる、いうなれば急激に刺激を与えるわけです。この場合、男は耐えるんです。ある程度（今の男の子はしりませんよ）。女の子は、だめですね。つまり、ある時は、ほめられると媚態を示し、おこられるとセンチメンタルな態度を示すんです。

周郷　ぼくも、女の大学にいて、たしかにそれは感じました。女が牝として行動することが多くなりましたね。戦前にはあまりなかったことです。学生運動なんかでもありますよ。〝女だから通る〟とか……。

服部　たしかにそうです。だから、幼稚園なんていうのは一番危ない職場です。あれは女の城ですから……。

だから、もう少しきびしくっていうか、女であるということから女自身が距離をもたないとだめです。

もっと暴言になりますが、ぼくは、幼稚園の先生にもっと高い給料を出すようにして、うんともうかる職場にするんです、かりに。すると男が先生になりますね。そうなると今度は本物の女の先生ができるんじゃないかと思う。

周郷　ぼくも幼稚園の園長をしてて、本当に、どうしても男が必要だと思いましたね。子どもも女にあきちゃうんです。ぼくでも男だもんだから……。

服部　よってくるでしょ？

周郷　イギリスなんかでは、学校を出てから、身体障害者の世話をしたとか、食堂で働いたとか、ある程度の経験がないと幼稚園の先生の養成機関に入れないとかいったふうにね、そういうことをヨーロッパはやってます。ところが日本では〝お勉強〟ばかりしていました。あれじゃだめなの。知識っていうのは男の世界だったんです。学問ていうのは、哲学も、男だけがやってきたものです。だからもっと女の人にふさわしい哲学が必要なんだな。ところがただ男のまねをする、それじゃだめなんですよ。

☆　おわりに・音楽について

服部　やはり今日の話は、音楽のことにはあまりいかなかったみたいですが……。

周郷　いや、なかなか……。

服部　ともかく one generation ちがう人が二人で話してるんですよ。（笑い）ぼくのおやじと同じ年なんですから……。ぼくがもう一つつけ加えたいことは、うちのおやじ、つまり周郷先生と同じ年でもう死んでしまったおやじが、ぼくに彼の恥部をかくそうとしたかもしれないけれど、見られちゃったわけ。ところが、彼がある女の人を一生懸命愛してしまったり、一生懸命自分の立場を守ろうとしたり、いわばあられもないというか、のっぴきならない形で生きている人間というものを見せたということの、教育的な意味が、一つ generation 下のぼくにはあるわけです。ところが、教育、大学の教育は知りませんが、幼稚園の教育の場合、いつでも、one generation はなれてるんです。小学生が幼稚園を教えるわけにはいかないんですから……。そこを、私は子どもの気持ちがよくわかるとか、私は子どもと同じように仲よくなれるとか、何ていったってうそにきまってると思うんです。

それは、大人が大人らしくあること、その人間がその日その日をまっとうに、一生懸命くらしているということを子どもに見せるしか、本質的にはないのではないか。音楽におきかえていうならば、私は音楽を好きだ、音楽を愛してるっていう人しか音楽を教えてはいけないのであって、音楽きらいな人はたくさんいますよ。いたってしょうがないから、そういう人はほかのことを教えたらいいですね。

周郷　ところが、幼稚園でも小学校でも、音楽のきらいな人が教えてますね。きらいって、まるっきりきらいじゃないけれど、音楽を本当に好きでない人が教えてるの。

服部　音楽のきらいな人に、好きにな

れっていったって無理でね。音楽きらいでも画が好きっていう人がいるでしょ？そしたら画を教えたらいいんです。all round なものにはなり得ないから、結局その、好きっていうことは、自分にとって真実っていうことなんです。自分にとって真実なことしか、やらない方がいいんじゃないですか？

周郷　無理に、心にもなく知ってるっていうのはいけないんだな、好きっていうのと、知ってるっていうのは違うわけですよ。

服部　子どものきらいな人は幼稚園の先生にならない方がいいですよね。それと同時に子どもの心がわかっているということは、大体、子どもが好きっていうことと同義語なんですよ。子どもといてやっていける人っていうのは……。

周郷　子どもが好きっていう、好きにいろいろあるけれどね。この間堀文子さんが家にきてね、ぼくの家の畠にチューリップが咲いてたころだったんだけれど、彼女はチューリップのことは何一ついわないの。山の花をきれいだきれいだっていって、ぼくはずい分花の名前を覚えました。やっぱり、好きっていうことも、花やの店にある花を〝きれいだわね〟なんていう、そんな好きじゃだめなの。野の花がきれいだな、と思えるような〝好き〟じゃなきゃだめなの。

服部　私の友だち、音楽家の友だちの中に商人の息子がいるんです。その家には音楽的ふん囲気なんていうのはこれっぽっちもないんです。私自身の家にはあったんです。祖母は音楽家でしたし、父も音楽を愛してましたし、ぼくは別です。ぼくはなるべくしてなったんです。

それで、音楽なんかやるのは、ばかだばかだといいながらそのおやじさんは死んだんですって。ところがそういいながら何かいうと金は出してくれたんですって。いいかえればそのおやじさんは音楽なんかわからないわけです。でも息子があれが好きならしょうがないというわけですよ。あの姿の方が本当のような気がします。おやじさん自身はいいとも思わないのに、〝音楽はいいもんだ〟なんていってもしょうがないですよね。

お母さんが、画が好きなのに、となりの子が音楽をやってるから、うちの子にも音楽をやらせなきゃだめかしら、なんていうの〝これからは音楽ができませんと〟なんていうのはとんでもない間違いです。

周郷　そりゃあだめです。そういうんじゃだめです。

服部　そういうことが、ぼくは非常になげやりで、ひょっとしたら教育ということを否定していることになるかもしれませんが、自分が自分自身に忠実に生き

て行くということが、教育者にとっても親にとっても一番大事なことじゃないかと思うんです。

周郷　たしかに子どもは、うそもかくしもない、いいかえれば、恥部を出しても、それが真実であれば……そういう、緊張した、生きてる姿、それが子どもはほしいんじゃないかな。それが今幼児をとりまく世界、家庭にも、まずないんだと思います。

音楽についても、そうでしょ？

☆　音楽のふたつの要素

服部　音楽っていうのはね、ぼくの考えからいくと、ふた種類しかないです。かきたてる音楽と、しずめる音楽、しかないんです。

周郷　ああ、なるほど！

服部　で、かきたてるわけです。音楽はかなりエロですからね。そのエロなんですけどね。音楽っていうのは、それだけやってると、おさまらなくなっちゃうんです。一つの音楽の中には eros と agape がなくちゃだめなんです。しずめるっていうのは agape なんです。

周郷　そりゃあ、ぼくなんかも、バッハなんかきいてるとね、ウィルヘルム・ケンプが武蔵野音大のパイプオルガンのひきぞめの時ききに行って、えらく感激したな。これは agape なんだな。

服部　ところがね、バッハなんか agape だけでもないんですよ。ちょっと eros もあるんです。

周郷　そうね、そうはいい切れませんね。

服部　ベートーベンなんてね、見てると、非常にかきたててるんです。ところが、かきたてている時に、かきたてきれなくなるらしいんだ、時々。それで、彼は精も根もつきはてて、みたいなところもあるんです。そうすると、そこが意外にいいんです。

周郷　モーツァルト、なんかよりもかきたてているところが多いな。

服部　モーツァルトっていうのはね、ある程度、B・G・M的なところがあるんです。あの人は一円、二円て書いた人だから……金がほしくて。

周郷　今の話ね、やっぱり教育の世界にも、その二つはあっていいと思いますね。かきたてるものとしずめるもの、だって、ぼくなんかにしても、かきたててほしい時がありますよね。気がふさいでる時なんか、音楽によってかきたててほしいですよ。

服部　ところがね、自分で声を作るようになってから、つくづく思うんですけれどね。かきたてる音楽っていうのは、書けないですね。かきたたないんです。

周郷　むずかしいんだろうね。

服部　不協和音みたいなものを、使えば使うほど、しずまっちゃうの。躍動しなくなっちゃうんです。音が複雑になればなるほど、かきたたなくなっちゃうんです。

だから、シェーンベルグなんかの音楽ね、あの十二音技法の、やっぱり、あの人すばらしいなと思うのは、ああいう音の複雑なつながりをもってて、すごいerotic な音楽が時々あるんです。ぼくにあの手法をもって書けといわれたら、絶対エロなんか書けません。そういう意味では、単純である方がエロ、かきたてますね。それから、もうちょっといい方をかえれば、低音の楽器の方がかきたてます。

周郷　ああ、そりゃわかるような気がするな。

服部　フルートみたいな楽器でかきたてろといったって、これはちょっとむりです。チェロとか、テナーサクソフォンとか、ああいう音はかきたてるんです。

周郷　日本の音楽でもそうかもしれないな。笛なんていうのはしずめる方だな。

服部　そうですよ、しずめる方ですよ。絶対に。津軽三味線みたいな方が、はるかにかきたてますよ。

周郷　ああ、あれはかきたてますよ。あれはそれに erotic ですよ。ぼくは函館で料理やへつれて行かれた時に、年とった女の人がきてね、江差追分をきいたんですよ。その三味線ね。録音機もって行けばよかったと思いましたね。

もう一つ、〝さみだれを集めて早し〟の最上川へ行った時……

服部　最上川のどこですか？　ぼくはあそこの人間ですから……

周郷　そこで、何でもない素人の最上川舟唄っていうのをきかせてくれたんです。ひとつ驚いたことはね、息が長いんですよ。これは本当に、しずめるっていうのか、つまり両方の山にこだまするように歌うんです。舟にのって歌ってるわけじゃないのに……ほんとにしずめますね。

服部　そういうね、さっきから話題になっている、かきたてるとか、しずめるとか、人間の基本的な心みたいなものは、幼児にはそのまんま、ばっちりわかっているんです。彼らはもちろんエロなんかわかりません。いうなれば mono sex です。でもわかるんです。だからいいですよ。幼児っていうのは。

周郷　いつまで話してもきりがないけれど、このくらいにして、服部さんの作った音楽のレコードでもきかせてもらいましょう。なかなかおもしろかった。

（一九七四・五・一〇）

夏休みを考える

——沈黙と空白の意味——

本田和子

能舞台の空白について、増田正造氏は次のように語っている。

——能が終ったというのではない。戯曲が一応終結する。シテは留拍子をふたつ踏む。一番の能はまだ終っていない。

シテは橋懸りを歩んで揚幕のかなたに消える。他の登場者も、囃子方も地謡も、いつの間にかいなくなる。舞台は雄渾に描かれた老松だけを残して、またもとの空白にもどって静まる。

（中　略）

空白の能舞台は、引幕の考案される以前の原始形態ではなく、根源的な深い意味を持っているのだと私は思う。無に回帰して再び有を生む、無限の時間への思惟がこめられていると思う。——

新しいものの創造にかかわる沈黙と空白の意味を、よく物語ることばである。一つの営みが終って、次の営みが始まるためには、今までのすべてを無に帰す一瞬が必要である。よみがえるためには、人は死なねばならないのだ。

古い時代の物語の数々は、新生にかかわる人間のちえを象徴的に示している。「他界訪問説話」の多くはこれであるし、これらの物語を「死と再生」のテーマでとらえることも可能であろう。

ここでは、わが国の古説話の中から、典型的な例の幾つかをあげながら、古代人のちえを探ってみることにしよう。

◆　◆　◆　◆

古事記の中に、オオナムジノカミ（大国主命）の「根の

国」訪問の物語が記載されている。オオナムジは兄神たちの嫉妬によって、しばしば生命をおびやかされていた。それを憂えた御祖（母神）は、オオナムジを旅立たせることにした。スサノオノミコトを頼って「根の堅州国」へ行かせたのである。「根の国」は「黄泉の国」ともよばれ、死者のおもむく所である。したがって、オオナムジは「死の国へ旅立った」ということになる。葦原の中つ国におけるそれまでの生を、ひとたびは否定したということになろうか。

「根の国」で彼を待ち受けたのは、スサノオによって与えられたさまざまな試みであった。蛇の室、蜂と百足の室、あるいは火のわざわいなどをかろうじてくぐり抜けたオオナムジは、スセリヒメという愛人と手を携え、「生大刀、生弓矢、天詔琴」という三種の宝器を手に入れて「根の国」から逃れてくる。逃げていくオオナムジに向かって、スサノオは次のように呼びかけている。すなわち、「お前は、その宝器を使って、兄神たちを討ち従え、国の主となるように。そして出雲の国に大きな宮殿を建て、スセリヒメを妻として暮すように」

以後、彼は大国主命とよばれて、出雲の国の国作りに励むこととなった。

この物語は、オオナムジ（あるいはアシハラノシコオ）とよばれていた一人の若者が、大国主命として生まれ変わり、知力・武力・政治力を身につけた一人前の男性として、新生の第一歩を踏み出すまでの過程を示している。「人の成長にかかわる古代的イメージ」が、象徴的に形象化された物語ということができよう。

オオナムジが「根の国」に滞在していた期間中、彼はこちらの世界には不在であった。すなわち、彼の存在は沈黙し、空白の期間を持ったわけである。その空白期間中に、彼は新しい自分を創り出したのであった。

新生のための準備（さまざまな試練）に、一人でいどみ、それらをくぐり抜ける。これが成長のための必須条件ということになろうか。人が真実に新しくなるための覚醒は、純粋に個の次元に成立する体験として、孤独のうちに訪れるということでもあろう。

オオナムジは、ミオヤノカミのもとをはなれて「根の国」へ行くという形で、日常的な生活のきずなを一応断ち切った。これは、彼が自分自身の心的空間に一人で閉じこもったことを意味すると考えてもよい。その心的空間に成立し

た体験において、彼は真に新しい自分をみつけ出したのである。

◈ ◈ ◈ ◈

よく知られた昔話の一つに、「わらしべ長者」の物語がある。一本のわらが次々とより価の高いものに変化して、ついには大きな幸せにつながるという段々ばなしの形式が興味をそそって、多くの人に親しまれてきた。

これは、「長谷寺霊験記」として、「今昔物語」等に採録されている。長谷寺は、古い時代の人々にとって、「夢を授ける聖所」であった。人々は、人間のちえでは克服し難いと思われる悩みや迷いからの解脱を、夢のお告げに求めて長谷寺にこもったのである。

「夢告」に従うことによって、人々の前には新しい道が開けた。ということは、当時の人々にとって、「夢告」が単なる夢やそらごとではなく、夢もまた一つの「うつつ」、すなわち現実と等価の体験として受けとめられていて、それゆえに夢の中で与えられた解決の指針が、現実を支配するに足るものと考えられていたことを示している。したがって、よい夢を得ることは、よい運命を与えられることと同義であった。だからこそ、「わらしべ長者」の主人公は、「夢のお告げが得られるまではここを動きません。もしお助けがなければ、ここで餓死するつもりです」とばかりに、観音の前に二十一日間も参籠し続けたのである。

夢を「うつつ」ととらえた古代的な世界認識を、未開なアニミズムと批判することはやさしい。しかし、これらの物語を通して、合理的知性を超えた古代人のちえを汲みとることこそ肝要ではないか。

夢をみているとき、人は別の世界にいる。私たちが日常的な現実とよんでいる目覚めた意識の世界から一時身をかくして、眠りの世界の住人となるわけである。古代人が、夢を得ることによって、新しい運命をつかまえたという多くの伝承は、現実を超えたもう一つの世界の重要性を物語っている。日常的な生活の側からみれば、夢とは、現実的な生が一時遮断され、沈黙と空白の中に沈みこむことである。人が、自身の新しい生を洞察するためには、それら沈黙と空白のときがいかに重要であるかを、古代人たちは体験的に知っていたのであった。

◈ ◈ ◈ ◈

私たちにとって、夏休みは、日常的な現実の一時的な遮断ではないだろうか。子どもからはなれ、職場の同僚からも遠ざかって、一人で自由に使える時間の中に浸り切る。保育者としての日常が、子どもとの出会いの中で慌しくすごす時間の連続であることを考えるなら、お休みは「保育者的な生」にとって沈黙と空白のときである。しかし、この空白期間は、それぞれが自分をよみがえらせる体験のときとして、私たちの前に置かれているのである。

他人との交わりもできるだけ避けて、一人だけで沈黙のときを過ごすことも許されているし、日常生活をおきざりにして旅に出ることも可能である。一学期の間、体中で受けとめておいたさまざまな保育体験を、それこそゆっくりと意識の明かるみに浮かび上がらせ、言葉として整理してみることもできよう。もちろん、本も読まず旅にも出ず、保育の整理など何一つせずに、ただのんびりと何もかも忘れて暮すことも、一つの大切な過ごし方であろう。何しろ、誰にはばかることもない、夏のお休みなのだから。

お休み中の時間は、純粋に自分に属す「とき」として使うことができるし、また、そう使うべきではないだろうか。平常の時間は、生活の秩序や職場のきまりを明らかにするものとして位置づいている。たとえば、八時までに出勤、九時から保育開始、保育時間は四時間半、などというように。しかし、お休み中の時間は、「私のために」流れる。「私」が、「私」に属する時間をとりもどすのである。

◈ ◈ ◈ ◈

大鼓の名手、川崎九淵氏は、現代の録音機械が、大鼓の音と音との間の沈黙を、充分に録音し得ないことを不満としていたといわれる。「間」の静寂こそ、大鼓の生命であるという。

長い沈黙の後に「ハッシ」と一つ鼓が打たれ、再び、長い沈黙が支配する。沈黙が音を生み出し、生み出された音がまた新たな沈黙を生む。音を生かすために「間」があるのか、静寂を区切るために音があるのか。このような、静寂と音との緊密な相互関係を、機械は充分に伝えきることができないというのでもあろうか。

M・ピカートは、「沈黙と言葉は密接不離の一体をなすものだ」という。それゆえに、

「もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまう」のである。

私たちの生活も、沈黙と空白の背景がなければその深さを失ってしまうのではないか。

「夏休み」この沈黙と空白のときを、私たちは、自身の新たな誕生のために用いるべきである。それでこそ、九月の朝、「以前よりもっとよい先生」として子どもたちの前に立つことができるのではないだろうか。

――おお、やわらかい褥のなかより
夢みつつ、なかば耳を傾けよ。
私の奏ずる絃のしらべに
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

私の奏ずる絃のしらべに
星々の群は
永遠のおもいを祝福する。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

永遠のおもいは
いや高く、神々しく、
私を現世の喧噪の巷よりたかめる。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

現世の喧噪の巷より
きみは私をつれなくも隔て、
私をこの冷気のなかへと遠ざける。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

私をこの冷気のなかへと遠ざけ、
ただ夢のなかで耳をかす。
おお、やわらかい褥のうえに
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

――ゲーテ「夜の歌」――

海辺にて

河井祥子

磯の香、その香に引きつけられるように、今日は満月の大潮、葉山の海岸へ……。

けれども今日の磯はいつもと少々違うのです。潮がひいているというだけの違いではないのです。私たちのグループのリーダーは、天皇陛下の生物のお話相手でいらっしゃり、カニ博士として世界的に有名な酒井恒先生なのです。

では、先生のイントロダクションからお聞かせいたしましょう。

〝ここ葉山の海にどの位の生物が生息しているとおもいますか……。それは、天文学的数字と言えるほど、たくさんの生き物が、ここで生活しているのです。だから、この海を埋め立ててしまえば その生物の住むところがなくなってしまうということですね…〟

☆ ヘリコプターから

海辺の生物をヘリコプターから見てみましょう。この辺はリアス式海岸なので生物が住みやすいのです。岩礁の違いにより分布状態も異なってきます。

もう一つ、大きい見方をしてみましょう。ウニ、ヒトデ、ナマコ等のように、何万年も前と同じように現在も生き続けているものもあります。その逆に、何万年もかかって少しずつ変化、進化していったものもあります。

防波堤にたくさんの〝アラレタマキビ〟という白い小指位の貝がついていたでしょう。今は、大潮で潮がひいていますけれど、満潮になってもほとんどあそこまで海水はいかないんですよ。この貝は、陸に住む〝かたつむ

り〃の仲間なんです。こうして、海の生物がだんだんと陸へあがっていくのです。

だから人間は、磯の香りがなつかしいのですよ。

☆ **どこに顔があるの？**

〃イソギンチャク〃を見てごらんなさい。アネモネの花のようでしょう。さあ、〃イソギンチャク〃の口はどこでしょう？ 鼻は？ あら、一体どこにあるのでしょう。海綿の口は？ 困りましたね。どれが一匹なのでしょう。ほんとうにわからないことだらけ。

岩を持ち上げて見ましょう。上より下の方にたくさんいるようですね。それは直射日光を避けて影にかくれる性質があるのだそうです。

お話をうかがっていながら、一歩一歩岩礁の方へ。今まで〃ムラサキウニ〃〃アメフラシ〃位しかこの海には住んでいないと思っていたのに。いるわいるわ岩について白くみみずのぬけがらのようなかたいもの。それも生きものなのです。その名は〃カンザシゴカイ〃、その名前を聞いて、皆顔を合わせる。どう見ても〃かんざし……〃という名前のつくような物ではない。

☆ **夜の磯**

〃カンザシゴカイ〃は夜になると、そのみみずのぬけがらの頭のような所から、角を出すのです。その角の先きには、かんざしが……。

夜は貝たちの世界。夜露にぬれた岩についた海藻を、長い舌を出して食べ物をあさっているものもあります。〃ヒザラガイ〃の仲間もその一つです。

また、〃ヨメガカサ〃と呼ばれる〃ウノアシ〃に似た貝も、自分の体長の五・五倍もある舌を出してエサを食べるのです。自分で動いてエサを探しに外出するものもあります。そして朝になると、また、もとの所へ戻ってくるのです。けれどもちょっと遠出をしすぎたり、迷子になったりして、中には、戻ってこられないのもいるそうです。

夜の海、まさに百鬼夜行のごとしだそうです。

☆ **子どもたち**

ウニの子どもたち、一匹のウニからいったい何匹産まれるのでしょう。

その数は、全人類の数と同じ位の卵を産むのだそうです。それがプランクトンと呼ばれ海に泳ぎ出て いくのです。そしてまた、もとの場所に戻ってくるものもあります。

卵をみつけました。ゼリー状の〃カザガイ〃の卵、この一立方センチメー

トル位の中にやはり無数の卵が動いているのです。

☆　なかよし

〃ウミノトラノオ〃は、海藻の仲間なのでしょう。岩にぴったりとくっついて、波にゆらゆらとゆらいでいます。それを先生は一つ離して見せてくださいました。するとその中から、小さな小さな一センチメートル（一番大きいものでこの位だそうです）位のカニが出てきました。「もう一匹いるはずなんだけれど」と探していらっしゃる。〃ウミトラノオ〃の根元には、トラノオガニが住んでいるのです。たいていの場合仲よく二匹住んでいるのです。

☆　かくれんぼ

〃ヨロイイソギンチャク〃あまりきれいなイソギンチャクではありません。砂や貝がらを体一杯に着けて。ちょっと見るとあまりないようですが、よく見るとすぐに十～二十匹位はあるのです。いたずらをしてさわると、ぴゅっと水を出して引込んでしまいました。

〃イソクズカニ〃は、たくさん海藻を背中につけています。これは、全部自分でつけるのだそうです。普通のカニは、一方にしかはさみが動かないのですが、このカニはとても器用で、背中までハサミがとどくのです。そして背中にはえている毛につけるのです。また、切り口から〃のり〃のでる海藻を知っていて着けるという方法もとるのです。

しかしこの護身術も、ほとんど人間に対してのみ有効なのだそうです。人間以外の生物は視覚以外の器官が発達しているためのようです。

まだまだたくさんの生物がそれぞれ特徴を持って生活している海です。その海と、また、私たちのふるさとの海を大切にしていかなければなりません。

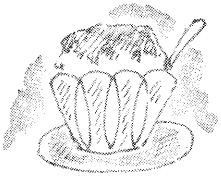
昨今、海の汚染が問題になっています。しかし、酒井先生はおっしゃいました。〃ヘドロの中にも、拡大してみると、そこに生命の美しさを、見ることができるのですよ〃と。

（お茶の水幼稚園）

◇講演◇

家庭教育を見直す

牛島義友



今日は少し無責任な話をさせてもらいます……あとでお叱りを受けるかもしれませんが。皆様がお考えになる刺激になればと申し上げますので、それをそのまま受け取るというのでなしに、考える材料として取ってほしいと思います。

この間、ある学芸大附属の先生たちと話したことがあるのです。それは、自分たちの附属学校の運営は九五%を父兄から補助されているがこんなことでは教育はできない、本当の教育は父兄からの負担によらないでやらなければというのです。しかし私は、私立は一〇〇%父兄の負担ではないか、と反対したのですが……学校教育は父兄と経済的に無関係でなくてはいけないかのように思っているようですが、それはとんでもない話で、教育は学校と親とが一緒になってやるべきものです。いや本当の教育はまず親がやるもので、学校はそれを補充する、と思いたいのです。この考えは一般の日本人の考えにはなっていないのですが……。

百年前のことを考えますと、子どもの基礎教育はいうまでもなく家庭がやっていた。しかもそれは何千年もの歴史をもっていて、当然、親がなすべきものと思われてきた。それがこの百年の間にガラッと変わって子どもの教育はすべて学校でやるべきもので、家庭でやったのではろくな教育ができないと思い込むように変わってきた。これは大変おかしな現象で、あまりに学校を買いかぶりすぎた現象なのです。

このごろよくいうように原点にもどって教育を考えると、まず家庭でするというのが建前のはずです。これは当然のことであり、親の基本的人権なのです。国際連合が一九四八年に行った人権の宣言の第二十六条に教育に関したものが三つうたわれてあります。第一はすべての子どもは教育を受ける権利があるということ、第二はその教育の内容で、民主的な平和を愛する人間に教育をしなくてはならないということ、第三は子どもをどのように教育するかをきめるのは、優先的に親の権利である。こう親の教育権が基本的人権であること世界的視野で宣言しているのです。

わが国の憲法はというと同様に第二十六条で教育について二つのことをのべている。第一はすべての子どもが能力に応じ教育をうける権利がある。第二は親は自分の子どもに普通教育を受けさす義務がある、それで打ち切りなんです。すなわち日本の新憲法においては親は子どもを学校にやる義務はあるが親の権利については一つも書いていない。教育基本法も、それから発展しているので親の権利については何もない。ただ民法には、親権をもつものは監護教育の権利と義務をもつことを述べていますが。つまり、親の基本的人権が軽視された状態なんです。

もともと親と子の関係、親が子を育て教育するというのは権利だから、義務だからやるというのでない、ごく自然の関係です。親としてわが子をよい子に育てようと必死になっている、いくら犠牲を払っても惜しくないのが自然な状態であり、この気持ちを尊重するなら、親の基本的人権ということになってくると思う。ところが日本の中には、そういう発想がないので、親は子に対してわが子と思ってはいけない、戦時中は「お国の子ども」、戦後は「社会の子」なのです。社会化されない親の愛情は親のエゴイズムだ、といわれてきた。そして親の教育権が完全に無視されてしまう。親が財政的に援助すると本当の教育ができなくなると嘆く教師も出てくることになる。ところが本筋に戻れば全く反対なわけですね。

子どもがある年齢になったら普通教育がうけられる、しかも無償で。日本では義務教育により教育の普及は非常に進んでいる。後進国では義務教育の必要性は非常に大きい。しかし、今の日本の段階で考えて義務教育制度が絶対的なものだろうか。教育普及の役割はすでに果しており、学校教育偏重や教育統制の弊害が現われているのではなかろうか。義務教育でなくても幼稚園などに八〇・七%もいく。幼稚園や保育所にいっていない五歳児の調査を行いましたが捜すのに骨が

折れました。これほど就園率の高い国はないんですね。高校進学率も八一・九%と高率です。英仏では五割位です。もし仮に義務制がなくなったとしたら小中学校就学がガタッと落ちるかというとそんな心配はなさそうです。九八%位は行くでしょう。このように親は自発的に子どもを教育しようとしているのに、いやそれはおまえたちの努力にあらず、国のなすところであって、義務を果せばよいといわれると、逆に悪い影響が出てくるのではないか。この子のために最高の教育をしている人にとっては、義務なるがゆえに子どもを学校にやるというのはむしろ不愉快です。十九世紀にイギリスのスペンサーなどは義務教育に反対していました。

ついでに言いますと、義務教育は無償であるということから、教育は安い、ただなんだ、という考え方が出てくるが、教育は金をかけなくてはだめなんだです。決してただではない、高いんです。若い親の立場からいうと、収入も少ないから安い方がよいし、よい教育を安く受けられるのは有難いと思う。しかし、子どもも大きくなり学校へ行かなくなってくるころに税金をどっさり取られるわけですね。教育ははじめは安かったがあとで取られる月賦みたいですね。月賦会社は収支のことしか考えつきませんか、国の場合、教育権が国にあると考え、更にその内容について指導を強化してきます。

貧しい人にも教育の機会を与えるのはよいが。官僚機構が発達してきて統制・管理が強くなる。……そこが問題なんです。誰がこういうふうにしてしまうかというと、喜んで義務教育に賛成する親です。義務制度にもよい点と悪い点があるわけですが、それをやたら拡充することは待ってほしいですね。

本来家庭教育が中心であったのが、学校教育におき替えられ、無力化されることは、望ましくないと思うのです。義務教育は、七歳からでも遅すぎることはない、北欧は七歳からです。しかし、その間、放任しているわけではないですし、家庭あるいは、保育所・幼稚園で教育されております。乳幼児は家庭で育て教育するのがよいし、また効果的です。

学校に行くのは遅くてよい。日本でも、その意味でやたらに就学年齢を下げればよいとするのは危険ではないでしょうか。今に零歳から義務教育を、となり、家庭は何も教育することがなくなる。これは自ら家庭教育を捨てていることですね。日本の親は子どもの教育に熱心です。けれども自分が直接、子どもを教育することをしようとしないし、自信もない。教えてくれる機関を一生懸命に選び、お金もつぎこむけ

れども……。これは応援団的存在で、直接コーチになればいいじゃありませんか。幼児から、低学年位なら、親が立派な教師になれる状況があるんです。今日は家事労働も減って、昔に比すれば三時間は余裕があるし、子どもの数も二人位と少ない。お母さん自身も教養を身につけている……こういう人が教師になる資格がないということはない。その気になれば立派にできるはずだが、無理に押さえて、学校に行くまでは自ら教育してはいけないと思っている。すべて学校に任せようとしている。世論も、幼児教育は積極的に母親がやれ、というべきなのに、ただ義務年齢を下げ、多くの経費をかけてあまり適切でもない学校での教育をやろうとしている。そこに反対の声をあげるべきですよ。もちろん有職の婦人など直接子どもの教育の困難な方は別途に考えなければなりませんが、「母親が直接子どもを教育せよ」と主説する人々が増えれば、お母さんたちはその気になり、またよい教育ができるはずです。（今日は大いにおだてようと思っているんですが……笑い）

親が学校教育に参加しようとすると、学校側はあまり喜ばない。親の要求が多いほど教育はやりにくい。また親も、もっと宿題を出し、学力をつけ進学率を高くしてほしいなどろくなことをいわない。まじめな教師は、全人教育をめざしているのに、親が反対のことを要求し、協力的でないということになってしまう。しかし、考えてみると、親は教育の社会的責任を負わされていないから無責任なこともいうのだと思う。親には教師以上に教育に責任があると自覚すれば、心構えも変わり、言うことも変わってくると思う。

ついでに申し上げますと、親だけでできる家庭教育には限界がありましょう。充分に親一人で教育できるのは四歳くらいまでしょう。友だちによる啓発も必要であり、学校に行くようになると、家庭教育がだんだんむずかしくなってきます。親に全面依存する時が一番教育のできる時です。学校に入学すると教師の影響力が強く、それだけ親の教育力が小さくなります。学校は自由の場ではなく、さまざまの規制と規律で束ばくされる所です。授業も一定の場で正しい姿勢で受け、物理的な時計で刻まれる生活にしばられる。…非自然的なことが多く、家庭の自由さとは正反対である。そこに先生が登場し未知の世界を興味豊かに開いてくれる。先生はえらい！　反面、廊下を走るとおこられ、こわい。まさに権威的存在ですね。その緊張したふん囲気の中で勉強するから教育的効果が上がる。先生はそれでいいが、学校から帰って来

た子どもはどうか。まずお母さんを求め、学校での緊張を解こうとする。しかし、それを迎えるお母さんは、以前は子どもの要求は、何でも受けいれてやるやさしい親であったが、学校へいくようになるとそろそろ教育をしなくては、と教育的態度に変わっている。だから帰ってきた子どもにまずきくことは、「今日の宿題は何でしたか、それを片づけないと遊びに行ってはいけません」となってしまう。子どもは年齢的にも親のいいなりにはならない時期にきているから、親に反抗する。すると「先生にいいますよ」と先生の権威を借りなければ指導ができなくなる。学校には教育的ふん囲気があるから、ききめがあるが、家庭ではそれがないので困難になる。ただ復習、予習や学校教育の延長しかできない。

だからあまり早くから学校的生活に入れない方がいいですね。学校に行くと表と裏が正反対になる。学校の優等生が家庭の問題児になることも多い。大人でも、外で働いている時はまじめで、帰ってきたらテレビばかりみてゴロゴロしていたり……。あまり緊張して勉強するより遊びと勉強が混合した状態の方が表裏の差がなくてよいと思います。

子どもの教育に親が取りくむ時、まず教育の目標理想像をはっきり持って、全人教育的に子どもの生活を指導していかなくてはならない。また教育条件をととのえていかねばならない。公害の多い高層マンションの密室で子どもが育つはずがない。まず場所から考え直していかなくてはならないと思うのです。小都市へ転勤するチャンスがあれば喜んで利用すべきですね。どうして東京を離れるのをいやがるのでしょう。東京に残っているなら自然に触れさすことを努力しなくてはならない。そんなことまで学校がやってくれるだろうと待っていてもダメ……教育の基礎からおぜんだてを考えていくことです。

現代の教育は子どもの要求を全部満たし、要求不満を非常に怖れているが〝耐える〟ということがぬけてくる。欲求のコントロール・フラストレイション・トレランスを養うことが大切です。今日の学校は鍛練ということをやりません。事故を恐れて、事なかれ主義で通している。鍛練できないように親がしているともいえますが、そんなことでは本当の教育はできないですね。

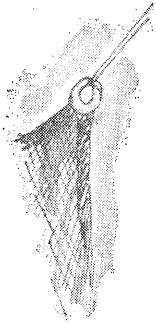
イギリスのパブリックスクール（全寮制）は、金もかかるが立派な教育をしている。広い敷地だが休日以外は校外へ出さず、ぜいたくはさせず、粗食に慣れさせながら、体育などきびしい訓練をする。そこから意志の強さなどが訓練されて

いく……日本の学校ではそんなことはしない。親がする以外ないのです。学校教育は知識教育にはよいが性格教育には問題が残ります。

最後に道徳教育の中で、どうしても親でなければというものを申し上げておきましょう。

子どもは駄菓子にとても魅力を持つ。お母さんにいってもダメという。すると黙ってお金をもち出したり、お店のをもってきてしまう。盗みをする。（六歳ごろ、多くの子どもにみられることで、ゲゼルも指摘しています）悪いということを承知の上で……そして隠そうとする。うそをつく。幼児の心理的うそとはちがう道徳的うそをつくようになる。オドオドして秘密をもった人になる。良心の呵責（かしゃく）を感じる。そのうちに親にわかり、親は動転し、厳しく叱る。そして多くの子どもはもう盗みやうそにはこりて二度とうそをつかなくなる……犯罪・良心・悔い改めを経験する。一度だけの経験かもしれませんが大切な経験です。このように革命的な経験で人は生まれかわる。その時、親が気がつかなかったり、叱ってはいけないと思ってそのままにしたらどうなるか……うそをつくのは気持ちが悪いが、結局は得だと、次のうそをとたくらみ、うそつきの子、盗癖の子にもなろう。叱られてこわかったという経験が、子どもの心に罪悪感を植えつけ、心のこだわりが出てくることが大事なのです。絶対に叱ってはいけないのではなく、この場合には叱らねばなりません。そして人生の最初の盗み、嘘言の時にすれば小さい叱り方で充分効果的です。しかしこの事件を的確に発見し指導するのは誰ができるのかといえば、学校や、幼稚園の先生ではなく、親だけがわかり、できるのです。このようなすばらしい人間改革ができるのは親だけなのです。これが家庭教育の最後の仕上げのポイントなのです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園ＰＴＡ講演会にて）



洋書紹介

Young Children

August 1973

Childhood Education

March 1973

Saturday Review

Nov. 1973 より

江波諄子

今回は、アメリカの文化人類学者として著名なマーガレット・ミード女史が、最近のNAEYCの集りでどんなことをいっているかに耳を傾けて、それからわが国でも近ごろ話題になり出したOpen Classroom Educationについて、アメリカにおける人々の受けとり方をいくつかご紹介しましょう。

ミード女史は講演（*Young Children*, August 1973 記載）を「子どもの社会化は多様性をより受け入れる方向に導き得るか」と題して多様性（Diversity）と継続性（Continuity）の重要性を説いています。

第二次世界大戦後、アメリカ人は彼らのあらゆる問題に対する解決や技術や教育や医薬を世界中の誰にも与えることができ、効かせられると信じていました。"Catch up"つまり「追いつく」という言葉は一九五〇年代には非常によく使われていました。そして誰もがみんな同じ物を使って、同じ物の中で生活することに興味を持っていました。もし、どんな型の教育でもそれがはやると、その他の世界の人々も無理にその方式をとるよう押しつけられました。

ニューギニアの原地民は、一九五三年にはアメリカ社会の模写を彼らの社会にとり入れようとしました。民族衣装

は脱ぎすて、ダンスは踊らないで、ズボンをはき誰もが学校へ行き始めました。しかしミード女史が一九七一年に三度ニューギニアを訪れてみますと、人々は再び頭の上に葉っぱや花を物を飾り、昔ながらのダンスをしていたのでした。彼らがいうには「十二歳まで子どもを学校へ通わせて、それからどうする？　それ以上のお金もないし学校もないし、その上十二歳は結婚するにも、一人前に働くにも小さすぎる」と。ニューギニアの人々は現代のアメリカ社会が当面している問題に、早くもつきあたってしまったのでした。紙と鉛筆のみが優先する唯一の出世の道への方法は、非常に危険な要素を含んでいるということを説いています。

現在のアメリカでは誰もが教育教育と傾き、大学の学部だけで終わるのはまるで "drop out"（中途退学）の感さえ持たれます。昔、「グリーン革命」といって世界のどこでも育つ米や麦の品種が改良され、奇蹟の米とか奇蹟の麦とか呼ばれました。しかし、ひとつの品種のみを植えると豊作の時はよいのですが、災害にあったら収穫はなくなってしまいます。東アフリカの農夫は、異なった品種を異なる土地に植え、毎年必ず少しずつの収穫を得るといいます。ミード女史は、今はちょうどアメリカがこの奇蹟の米や麦をつくった時代とよく似ているといいます。

問題をもう少し幼児教育の具体的な所におろしてきますと、アメリカは過去十年間誰をも同じように教育し、またそうできるように努力してきました。その考え自体はすばらしいのですが、方法論において誤っているといいます。ひとりひとりの子どもはすべて異なったバックグラウンドからきたのに、自分にあるもので人にないものを押しつけて、みんな同じようにしようということの危険を、アフリカ人の米の収穫の仕方を例にとって説明した訳です。ですから、たとえばフィンガーペインティングは家具でぎっしりうまった小ぎれいなアパートメントに住んでいる子どもにはよくても、田舎の戸外で終日どろんこ遊びなどをしている子どもにはそれほどでもないということなのです。

―安全は多様性の中に存在する―、これが女史のいいたかったことのひとつで、多様化と社会化の中でわれわれは、子どもが何を持っていて何が必要かを知ることによって、ひとりひとりの子どもを育てていかねばならないといっております

女史が掲げようとしたもうひとつの点は、"Continuity"

（継続）の問題です。家庭という小さな単位の中でも、夫と妻は普通全く異なるバックグラウンドから来ておりますし、その中で子どもたちがテレビ番組の「セサミ・ストリート」などを見せられることは悪くないのですが、子どもたちの先生はほとんどみておりませんし、両親もその時間はたいてい忙しくて見ておりません。子どもは同年齢の子どもとの共通の話題はテレビから得ても、両親や先生とわかち合う話題を持つことが非常に少ないのです。子どもたちが毎日、毎時間何を話して何をしているのかを知ることは、われわれ大人たちがしなければならない最も大切なことのひとつです。そして、断絶した世の中で少しでも継続性を保つために、保育所や託児所などに手のあいた老人が来られるようにするのは、ひとつの方法であるといいます。老人はそれほど力はありませんが。子どもたちを見つめ、すわってお話をすることもできます。これは職業的にもある程度成り立つことでしょう。

以上の二点がミード女史の講演の要点であるようでした。

さて次に、今話題の“Open Classroom Education”についてアメリカにおける反応を *Childhood Education*, (Mar. 1973) と *Saturday Review*, (Nov. 1973) の中の記事を中心にご紹介いたしましょう。

オープン・クラスルーム教育は今から十年ほど前にイギリスで、小学校の学習形態のひとつで informal classroom として始まりました。その教育哲学は、①自由、②尊厳、③個々の子どもへの注意、ということでした。これがアメリカに入って来て open classroom となり、その根本思想は、

①子どもは生れつき好奇心が強く、大人が始終監視していなくても探究する。

②幼児期に子どもが学ぶ初歩的な方法として、遊びは仕事と区別されない。

③学習は常に反応のある刺激を与える環境の中にあり、先生が教えている時だけではない。

ということでした。

オープン・クラスルームにはいろいろな活動をする場が設けられています。たとえば、カーペットの敷いてある床。本やおもちゃを持ってはいまわれるこじんまりした居心地よい場所。芸術とか数字の活動をするのに必要な材料やテーブル。砂や木工道具やバッテリーやバルブや動物、

植物などの教材が部屋の中に準備にされています。

このようなクラスルームにおける先生の役割は、①子どもに材料を提供する、②ひとりひとりの子どもの進歩を観察し記録する、③必要な時に手をかしながら子どもから子どもへと動く、④子どもが自分の仕事をひとりでやっていけるように学習を支え、準備する、となっています。

こうした考えの下でイギリスでは理想的な教育が行われるようになったのですが、これがアメリカに入って来た時の過程とその後の問題点を、Roland S. Barth 氏（マサチューセッツ州のニュートンという所にある Angier School の校長）は、"Should We Forget About Open Education?" と題して指摘しています。

それによりますと、もともとイギリスではこのような学習形態を "informal classroom" と呼びまして、そのやり方をはっきりと定義することはしませんでした。しかし子どもや彼らの学習過程について先生の信念が一致していて、各クラスとも非常によく似ています。それに対してアメリカでは、オープン・クラスルームでの学習方法を詳しく分析し、教材や用具を規定し、先生の行動の限界を成文化し、きちんとした用語集などをつくりましたが、それにもかかわらず各クラスルームでは、その先生の特定の興味を反映して、子どもたちの学習内容はさまざまに異なっています。その上、オープン・クラスルームで教える先生の多くは、いかに子どもを観察し、何を観察し、観察したものについていかに反応して教授を修正するか知らないといいます。イギリスでの成功の原因は、上手な観察や診断、それらから豊かな情報を得、子どもの学習を助け、材料や経験の広さで子どもたちに反応する先生がいるからで、その意味でアメリカの教師の質と比較しています。カナダにある Simon Fraser 大学の Selma Wassermann 教授は、オープン・クラスルーム教育をするには、まずそこで教える先生を教育しなければならないとして、大学における教師養成のためのオープン・クラスルームを Childhood Education (March 1973) に紹介しています。その中で彼は、「先生というものは教えるようにいわれたことを教えるのではなく、自分自身が教わったように実際には教えるものである」という言葉を引用し、将来小学校の教師になろうとする学生を実際の授業形態の中で、つまり講義でなく実際に子どもたちが学ぶような形態で、まず未来の教師自身が学んでみる方法を行っています。このような大学におけ

る授業形態の中で、学生はさまざまな教育資源をつかって自分自身を教えることが要求されます。もちろんその上セミナーなどで話し合いを通して研究するわけで、ほとんどの学生の最初はとまどうが後には、このような学習形態に対して非常に肯定的な考えを持つようになると報告しています。

以上の少数の記事から得る、アメリカのオープン・クラスルーム教育の問題点は、おもにそこで教える教師にあるようで、この点について、先の講演会でマーガレット・ミード女史は、ひとりの子どもをひとりの先生が一年間みるというのでなく、"Team Teaching" という方法を提案しています。あまりに多すぎもしない幾人かの先生によって子どもたちの学習に変化を与えることは重要性を説いています。

さて、*Saturday Review* の中の Barth 氏のオープン・クラスルーム教育に対する意見の結びは次のようになっています。

彼は、イギリスから入って来たこういう授業形態は、それまで何の疑問もなしに行っていた古い授業形態目からざめさせ、イギリスでのあいまいな概念をはっきりさせることになった利点は認めるが、現場においては実際に真のよいオープン教育方法が行われていないので、Open か Traditional かの論争は危険でみにくいものであると考えます。そして大切なことは、教師が自分のクラスを注意深く調べ、子どもが学ぶのに何が必要かを決定し、そして自信と想像力と勇気を持つことの方がより困難ではあるがやりがいのある革命的な方法であるといい、教師の Sensitivity（感受性）とBoldness（勇敢さ）の大切さを主張して、それは現行のオープン・クラスルーム教育からは生れてこないと結んでいます。

西欧の新しい物の考え方や方法をたやすく取り入れやすい日本においても、現在アメリカで行われている論争や試行は、明日の私たちにとって十分知るのに値するものではないでしょうか。

（十文字学園女子短期大学）

出会い

赤間峰子

周郷博先生

昭和十六年、自分ではそんなに年をとったと思わないのに、私が先生に教えをうけた年です。この年に大東亜戦争が始まって、勤労奉仕のあとそのままモンペ姿で周郷先生の授業に出たこともありました。当時は五年間の女学校を出ると、さっさとお嫁に行く人、花嫁修業にいそしむ人の多かった時代で、私はやっと一年間ならばと父の許可を得て保育実習科に入学しましたが、今の若い方々から見たら何とも幼稚な存在でした。でも何といっても女学校の時と違い、偉いというか、重味のある先生方の講義には、ただただびっくりして一生懸命勉強したつもりです。その中のお一人周郷先生は、思えばまだお若かったのですが、物静かに、考え考えお話しになるごようすは今と変わりませんでした。

在学中の十一月に父が全く急に死にました。その一ヵ月あと、十二月八日に大東亜戦争が始まり、昭和十七年に卒業、就職、一斉休園、終戦、再勤務、結婚、とまことにめまぐるしい時を経験しました。月日のたつのは早いもので二人の娘の内、下の娘がいつのまにか高校生になりました。そのころ新聞で、あの時の周郷先生がお茶の水幼稚園の園長になられたことを知りました。そして、その新聞記事を見て、やっぱりお偉い先生だったのだなあ、と今さらのように思いました。

そしてこれが私の性分で、急に思い立って夏休みの日本幼稚園協会の講習会に出席したのです。長い主婦生活からとびこんだこの講習会は、ちょうど保育実習科に入学した時のように、私に新鮮な感激をもたらしました。帰りに園長室におよりして、その日の講師吉田一穂先生を交えて三人で何をお話したのか覚えていないほど夢中で時をすごしました。この年の暮に、私は思いがけず急に今の仕事をおひきうけする羽目になりました。考えてみると、この周郷先生との再度の出会いで、先生がここにいらっしゃるのならという甘え（あとでこのことではずい分先生にご迷惑をおかけしたり、叱られたりもしましたが）と、女の人も社会とつながりをもった何かをした方がいいとおっしゃったそのことが、私をこの仕事にとびこませたのだと思います。

そして四年目を迎えた今、主婦だけの生活であったならば決して得ることのできないすばらしい〝出会い〟の数々を経験しております。といっても私のそれは、まだ直接にはお目にかかったことはなくて、手紙、または電話でのお声を通しての〝出会い〟が多いのです、次にそのいくつかをご紹介いたします。

鼓　常良先生

七十二巻十二月号に〝幼児教育から世界観へ〟を執筆して下さいました。長年、モンテッソーリ教育にうちこんでいらした先生のお書きになったものは、心打たれるものをたくさんに含んでいました。殊に、よくいわれる「しあわせ」という言葉について、それが幼児教育の場合は大人の先入観のプラスされた「しあわせ」が幼児の「しあわせ」であるかのように誤解されているところから教育が間違った方向に進んでしまったというところは、全くその通りだと身にしみて読みました。

ところがいただいた原稿には、その「しあわせ」が「しやわせ」と書いてあるのです。私はむしろ「しやわせ」でもいいのではないかとそのままにしておきました。何かこの方があたたかい感じがしたのです、でもそれではおかしいという声もあり、私は一度先生にうかがってみようと、京都へお電話いたしました。

〝ああ、私の間違いです。なおして下さってけっこうです〟と、とてもお若いお声、私はちょっと惜しいような気持ちで原稿の文字を直しました。まだお目にかかったこともないのですが、相当のご年配とうかがっていましたが、ちょっと笑いながら、何のこだわりもなくおっしゃって下さったあのお声は忘れられません。いつまでもお元気で、と祈っております。

岸田今日子さん

私は昔から岸田今日子さんのファンでした。今も毎日曜日、〝世界の子どもたち〟というテレビを必ず見て、各国の子どもたちの心を伝えて下さる岸田さんの声にきき惚れています。ただ声がいいというだけでなく、この方はきっと子どもの心のわかる方なのだなと思いました。ご自分のお嬢さんと童話を合作なさるとかききましたし、一度原稿をお願いしましょうと編集会議で相談いたしました。でも、とても忙しい方だし有名人だからと、半分はあきらめていました。

ところがある日、私の同封した返信用の葉書に、見るからに忙しそうに次のようなことが書かれて届きました。

〝お手紙拝見いたしました。今丁度芝居の旅公演の最中で、二、三日だけ帰京いたしましたが、十一月一ぱい東北、北海道

を廻ります。原稿はとても無理だと思いますのでどうぞあしからずご了承下さいませ。なお次の機会にと申上げたいのですけれど七枚以上のように長いものは書いたことがなくて、二、三枚でしたら何とかなると思いますけれど……〃

〃岸田今日子〃のサインはいかにも女優さんらしい字で書かれていましたが、何と誠意のある方だろう、と私は感激して、また次の機会にぜひとお返事を書きました。そして今年になって図々しく、今度は短いものをとお願いして、お忙しかろうからとあきらめておりましたところ、すばらしい原稿が届きました。六月号掲載のものです。

その上、この文章の中に出てくる〃星の王子さま〃のレコードは、以前に幼稚園協会の講習会で内藤濯先生が講演なさいました時に声と言葉の大切さを話されて、その時に参考にきかせて下さったもので、読者の中にもお聞きになってああれかとお思いになった方も多いと思います。

谷川俊太郎さん

今年の三月、新聞で谷川さんの書かれた〃絵本と私〃を読みました、その初めに、〃私の出会った最初の絵本〃として忘れもしない私がやはり子どものころ大好きだった、野上弥生子先生訳〃小さき生きもの〃の名前が書いてありました。ちょうど私が幼稚園の年長のころだったでしょうか、何かというと熱を出してねこんでいた私は、家の誰彼にこの本を読ませてはほとんど暗記する位好きでした。その本はその名の通り、人間と同じような生活をしている動物たちの話で、わが家の動物（犬、リス、うさぎ）は全部この絵本の動物の名前を拝借して命名したものです。

あまりのなつかしさに私はさっそく谷川さんに手紙を書きました。私がこんなに大切にしていたこの本を終戦のドサクサでなくなしてしまったこともかきそえて……。

そして思いがけず谷川さんからお返事が届きました。大きな封筒の右肩に、まるで絵本の中の文字のようにちんまりと私の住所と宛名が書かれて、その中にはお手紙と、谷川さんの書かれた絵本が一冊、そしてなつかしい〃小さき生きもの〃六ページ分のコピーしたものが入っていたのです。私は踊り出したいようにうれしくなりました。

それから少したって落ついて、今度は少々職業意識のようなものが頭をもたげてきて、〃一度、私どもの雑誌にご執筆を〃などと手紙を書いてしまったのです。そして書いてしまってから折角の美しい出会いをこわしてしまったような気がして、今度はまたおわびの葉書をかいたり、われながらオタオタしたものです。

ところがその二日ほどあとに谷川さんご自身からお電話がありました。〝原稿は書いてもいいが、今はちょっと長いものを手がけているので、それがすんだころに少しテーマを変えて〟とのこと。私は、谷川さんという方はたしか私よりはお若い、でも〝小さき生きものを〟お読みになった方なら、そんなにお若くないと思っていますが……とてもさわやかなお声でした。

そろそろ、どんなテーマでお願いしようかなどと編集委員の先生方とご相談しているところです。

野上弥生子先生

野上弥生子先生、谷川さんからいただいたお手紙には次のように書いてありました。

〝野上弥生子さんとは、夏の信州での隣人で、私は赤坊のころから頭が上りません。野上さんが当時の児童文化に果された役割は小さくないと思います〟

野上弥生子先生、ご高齢にかかわらず長編ととりくんでいらっしゃるとか、最近の新聞で読んだばかりです。でもまた私の無鉄砲さが頭をもたげました。手がふるえるような気持ちで手紙を書き始めましたが、〝小さき生きもの〟のことにふれると不思議と筆が進みました。

そして折り返し次のようなお返事が、すばらしいかれた文字で書かれて私の手許に届きました。

〝拝復　御手紙拝見いたしました。「小さき生きもの」は私の手もとにも一冊しかございません。あれは英文の原書がなかなかよくできてゐるので訳した次第でした。

御骨をりの雑誌になにか書いてお手数ができるとよろしいのですが、ただ着手いたしてをります長いものがございまして、且つ人いちばいの遅筆で毎日苦労致してをります故、貴意にそひかねます。御許しを願ひます。〟　（原文のまま）

文字はもちろんのこと、美しい文章に、私はただただ恐れ入りました。日本語の美しさを今さらのように考えさせられました。それにしても私のような名もない、一介の編集者にこれだけの礼をつくされる、やはりこれは野上先生のなみなみならないお人柄、底に流れる人間のまごころがひしひしと感じられたのでした。私も折返し、いつまでもお元気でお仕事の完成の暁にはぜひ私どもに一言、とお願いの葉書をしたためました。

（編集部）

〝幼児ののぞましい言語指導はどのようにすればよいか〟より

子どもの表現―「感じたこと・考えたこと」と「ことばで表わすこと」―

大津市立大津幼稚園

動植物などの遊びにおける話しことばとその指導事例

I　六月一日（月）五歳児

●活動の場　テラスでかたつむりに触れながら遊んでいる

●実際の活動（ゴチックが教師の活動）

Ki男、Ka男、S子など数名がかたつむりのまわりに集まって話している。

Ki男「つのだせ、やりだせ、頭だせ」とうたっている。

Ka男がかたつむりの殻の細いのをみつけて

「あっほそながでんでんや」

S子、かたつむりのつのと目を見つけて

「小さいほうがつのやで、大きいほうが目やで、目さわると へっこむの、S子の本にかいたった」

と言いながら目やつのにさわる。水そうのふちを指して

S子「こんなとこでもわたりよるで」

教師「**そんならこんな細いところでもわたるかな**」と言って二本の工作用角棒を出す。

U子、Ta男がかたつむりを手に持っているのを見て

「いやらしー」

H男「かわいいやないか」

みんなで二匹を棒の上へのせて競争させる。

H男「男（大きい方に対して）がんばれ」

K子「大きいほうがんばれ、がんばれ」

「こっち（大きいほう）お母さん」

「こっち（小さいほう）こども」

全員「がんばれ、がんばれ」
T男「おーい、みてみー、おもしろいことしてるぞ」
とかたつむりで遊んでいるのをみつけて友だちをさそって集まってくる。
H男「こんどはすべり台」
とかたつむりをつまんで棒の上をすべらせる。
みんながおもしろがってわらう。
M子「でんでんむしさん、わらわはるで」

●考察

それぞれの幼児がいろいろな見方でかたつむりに接し、かたつむりに対して感じたことを思いのままの言葉で話している。教師は、「細ながでんでんや」とか「かわいいやないか」とか「かたつむりさんわらわはるで」などという個性的な表現をもっと大切に受けとめ、表現した幼児に自信をもたせるような助言をする必要があったのではないか。

II　六月十八日（月）五歳児

●活動の場　テラスでかたつむりを見て遊んでいる。

●実際の活動

大きなかたつむりの背に小さなかたつむりがのっているのを見て

T男「ほーら、このかたつむりお父さんやわ、上にのっとるの赤ちゃんやね、かわいらしいね」
そばにN男、K男らが集まってきて見ている。
教師「T男くん、お父さんのせなかにのったことあるの？」
T男「うん、あるよ、おもしろかったわー」
教師「そう、かたつむりさんもTちゃんといっしょやね」
T男「らくちんやなー」

●考察

大きなかたつむりはお父さんで、小さいのは赤ちゃんだと感じて自分の経験と結びつけて話している。教師の幼児の経験を問い正していく助言によって出てきた「らくちんやなー」ということばのなかに、T男の父親に対する親近感と信頼感のようなものが感じられる。

III　六月二十日（水）五歳児

●活動の場　飼育しているかめを見ている

●実際の活動

水の中で手や足、首も引っ込めているかめを見ている。
Sk男「あれ、このかめさむいにゃわ、首も手も足もみんなすっ

こめとる」

教師「**あらほんとやね、Sk男くん、さむそうやね、かわいそうみたいね**」

Sk男「そうや、水が多すぎる、ちょっとにしたろ」

Sk男はままごと道具のコップをとってきて水を出してやる。するとかめが首を出し手や足も出しはじめた。

Sk男「やっぱりさむかったにゃ！」

と大声でうれしそうにいう。

教師「**ほんとね、きっとかめさんSk男くんありがとうって言ってるよ**」

Sk男、満足そうにこっと笑う。

●**考察**

かめが首や手足をひっこめて水のたくさん入ったところにいるのを見て、寒いのではないだろうかとやさしい思いやりの気持ちを持って話していることばからうかがえる。また、自分なりの論理でみて考えたことを行動にうつしている。

Ⅳ　六月二十三日（土）五歳児

●**活動の場**　テラスで積木を使い、かたつむりの家を作って遊んでいる。

●**実際の活動**

積木でかたつむりの遊び場を作り、その中にかたつむりを入れて遊んでいる。

U男「じっとしとる、とまっとる、しんどいやね」

教師「**かたつむりさん、つかれたのね**」

「**M子ちゃんもいっしょにしてるの**」

M子「赤ちゃんのおへやつくってるの」

「お花もいれてやろう」

とあじさいの花や葉をもってきて、積木で作ったへやの中に入れてやる。

教師「**かたつむりさん、あじさいのお花好きなのかしら**」

T子「いいにおいするしきれいやしね」

M子「かくれられるし、つかまらへんしね、よーけいれたげよ」

●**考察**

かたつむりと一緒に遊びながら、自分と同一化してかたつむりを見、かたつむりに対して心配してやったり、お花を使って飾ってやったりしながらやさしい気持ちを話している。

Ⅴ　六月二十七日（水）五歳児

●活動の場　かたつむりを水槽から机の上に出して遊ぶ

●実際の活動

S男、机の上においたかたつむりが、床の上に降りてきたのを見つけて

「こんなとこまでおりてきよった」

K子、自分のうでにのぼらせながら

「あーこそば、こんなとこまできょった」

「つめたいなあ、こんなぬれた」

とかたつむりの通ったあとを見ている。

M子、積木でかたつむりの家を作っている。積木のすき間からかたつむりが出てきたのを見つけて

「こんなところから出てきよるー

教師「散歩に行くのとちがう?」

M子「ここからずっと上のほうにきよるのとちがうか」

「大きいのがこんなところにいよる」

とすみの方の積木を一つのける。

教師「そこ、玄関とちがう?」

M子「そうや、玄関やし出てきよるんやわ」

教師「殻(から)こわれてるのは、あんまり強くもたないようにしてあげてね」

M子、机の下の方にくっついているかたつむりを見つけて

「これこわれてるし、どうして家の中へ入れたろ」

教師「はっぱをそばにもっていってやったらそこへのりにくるのとちがう?」

M子は教師に言われたように葉っぱの上にかたつむりをのせて水槽の家に入れてやる。

M子、水槽のふたのかたつむりの通ったあとを見つむて

「先生、あわや」

教師「きれいやね」

S子は友だちが遊んでいるのを見て話している。

S子「でんでん虫たべる虫がいるんやで、私の本にかいたった」

●考察

でんでんむしと遊んで、K子は肌で感じたことをことばとして表現しているし、M子やS子は自分の生活経験と結びつけて話している。教師は「殻のこわれている……」というようにかたつむりを物的に見たことばで助言しているが、たとえば「けがをしている……」というように幼児が身近に感じていたわりの気持ちをもったり、想像を広げたりできるような助言が必要であった。「葉っぱをそばにもっていって……」という助言にも同じような

ことが言えるのではないか。

Ⅵ　六月二十八日（木）五歳児

●活動の場　積木でかたつむりの遊び場を作って遊ぶ。

●実際の活動

男児三、四名がかたつむりの家作りをしようと集まって積木を並べている。

Mk男「これずーっと道がつづいてるにゃで」

Kk男「ここかたつむりの通る道やね」

Mk男、教師のそばによってきて

「先生、きょうはかたつむりのえんそくやで、あそこが皇子ヶ丘公園や」

と三角の積木がつんであるところを指す。

教師「そう、幼稚園のえんそくと同じところへえんそくしやはるんやね」

U男「先生もう道つくれたしかたつむり出してもいい？」

教師「かたつむりさんえんそくやし、うれしやろね」

かたつむりを飼育箱から出す。

Mm男「そうや、ぼくらと同じように並ばしたげよか」

Mk男「うん、ぼくこのかたつむりといっしょや先頭やで」

とかたつむりを二匹並べる。

Mm男「このかたつむりが先生やで」

と一番先に一匹出したかたつむりを指す。

Mk男「うん」とうれしそうにうなずく。

半円形の積木を並べて

Mk男「これ橋にしょう、あっそうや君とこ行く道にしょう」

しばらくみんなかたつむりの歩くようすを見ている。

U男、うしろに並んでいたかたつむりが先頭を追いこすのを見て

「おい、先生のかたつむりより先に行きよる」

Nk男「このかたつむりを先生にしょうか」

と先に行ったかたつむりを指す、

「もうすぐ皇子ヶ丘公園やね」

じっと停っていると「休んどる」、積木で作った道からそれると「そんなところへ行ってはいけません」などみんなそれぞれに思ったことを話している。

●考察

積木を並べているうちにMk君は皇子ヶ丘公園のイメージをもったようである。そしてえんそくさせようと話し合い、自分たちの経験と結びつけながら、かたつむりと自分たちと同じだと感じて

話している。

Ⅶ　六月二十九日（金）五歳児

●活動の場　園庭でかたつむりのお墓作りをする。

●実際の活動

貝がらが少しつぶれて弱っていたかたつむりを赤十字のマークをつけた飼育箱に入れておいたが、死んでしまった。そのかたつむりを見つけて集まった幼児四、五名が話している。

全員、口々に「かわいそうに、かわいそうに」

U男「このかたつむりのはか作ったろ」

K男「そうや、そうや」

死んだらお墓を作ればよいと、簡単に思わせたくなかったので「そうね、おはかね」と言いながらほかの幼児の遊びにかかわっている。

U男「はよう、おはか作ろうな」

Kt男「先生、時間なくなるよ、はよー」

教師「どこかいいところはないかな」

S男「ふまはらへんとこがええわ」

みんなで園庭に出てお墓を作るのに適当な場所をさがす。

U男、はと小屋のところへ走って行って

「ここにしょうか」

S男「あかん、あかん、ここかくれんぼする時かくれるし」

Mu子「あのねお花のあるところがきれいやしいいよ」

教師「どこかいいところはないかな、あのもみじの木の下はどう？」

みんなでもみじの木のところへ行く、ここがいいということで穴を掘り、死んだかたつむりをうめてお花をかざってやる。作ったお墓のそばで小さなかたつむりを見つける。

U男「あーっ赤ちゃんでんでん、よおーけいよる」

Kt男「あーそうや、死んだかたつむりのかわりに赤ちゃんでんでんむしを神さまがくれはったんやね、E男くん」

E男、うんうんとうなずき笑っている。

Kt男「先生、そうやろ」

教師「そうやね、そうかもしれないね」

U男でんでんむしを見ながら

「もうこの赤ちゃんでんでんは死にやしたらあかんわ」

S男
E男
Kt男「そうや、そうや」

教師「こんどはだいじにしてやってね」

Kt「でんでんむし、どこで生まれよるんやろ」
S男「あのな、土の中でたまご生んで、それで生まれよるんやで」
Kt男「ふうーん、それでここにいよったんやな」

●考察

かたつむりの死に対して、死んでしまったらお墓を作ればよいと簡単に片付けてしまうより、もっと大切にすることを考えさせたいと思って、教師はお墓作りに積極的でなかったが、幼児はお墓を作るために「みんながふまないところ」とか「お花のあるところ」などと、かたつむりに対してやさしい思いやりの気持ちを発言をしている。またお墓を作ったそばで偶然に小さいかたつむりを見つけたことで、幼児も感動し今度は大事にしようという気持ちを強く持ったようである。幼児の身近にかたつむりがいたことで、新たな疑問も生まれたようである。(このあと事例十数例略)

考察のまとめ

(1) 自分の経験をよみがえらせたり、結びつけたりしながらその時のイメージをことばにして話す

。 大きなかたつむりの背中に小さいかたつむりがのっているのを見て、自分が父親の背中にのせてもらった時のことに思いをはせながら話している。

。 積木でかたつむりの遊び場を作って遊んでいる過程で、積木を並べてみたら自分たちが園外保育に行った時のことが思いうかんできて、その時のイメージを結びつけながら、話している。また、自分たちの経験したことをよりたしかに言語化している。

(2) 新しく見つけた世界について不思議に思ったことを話す

。 死んだかたつむりがかわいそうという気持ちから、かたつむりのお墓を作り、そこで小さなかたつむりを見つけた喜びは大きく子ども自身の心に永遠の生をたたえる共感をおこし、不思議に思ったことをことばで話している。子ども自身が死から生をみつけ出し、想像的に話しているが、つぎには「でんでんむし、どこから生まれよるにゃろ」と現実にたちかえった疑問を話している。このように想像の世界を現実の世界の両方に生きている幼児の特性が話しことばによく現われているように思う。

。 えびがにを直接手でさわってみたりすることにより、新しい発見をし、見つけたことを話すことにより疑問をもち、知ろうとしたり考えたりしている。

(3) 自分の気持ちを対象である小動物に託したようなことばで話す

○ 自分もそうだからかたつむりもそうであるという気持ちから、かたつむりに対するやさしい親しみの気持ちをことばで表現している。

(4) 考えたことやその考えを現実化したり、行動化しながら、そのことをありのままのことばで話す

○ 首をすっこめているかめの場合（前出）

○ かめにえさを与えている時、幼児は自分とかめは同じだと感じて「水の中やないとのどがかわくにやわ」という話しことばでえさの与え方を話し、幼児が感じた通り、かめが水の中でえさを食べるのを見て、その喜びを「そうや、水の中やないとあかんにゃで、水がないと泳げへんやんか」と自信をもった話しことばとして、いいあらわし、さらに音にかめが反応するのでないかという自分なりの考えを発展させ、ためしている。

○ 砂遊び場で山や川を作り、川を掘ったところにといをつないで水をうまく流そうとしているのであるが、水の流れ方、たまり具合などを見て考えついたことを「こんなところにたまりよる」いくのはいくけどな、こんなところにたまりよる」などありのままのことばでいい表わし論理をすすめている。

対談について

二月号に非常にユニークな音楽教育論を執筆して下さった服部公一氏を読者の皆さまはご記憶と思います。対談の中にも出てくるようにワン・ジェネレーションの違いをもつお二人の対談はなかなか考えさせられるものがあります。

六月十日にご自身の作品発表会を控えていらっしゃる服部さんのご希望で、赤坂の服部さんの事務所を拝借してこの対談をさせていただきました。ちょっとむしむしするような夜でしたが次から次へとお話がはずみ、私どもが腰をあげたのは夜の十時半でした。

帰るみちみち、〝あれほど自分をさらけ出す人も珍しい。今日はいい話だった〟と周郷先生はおっしゃりながら、〝終電に間に合わないと大変だ〟とタクシーに乗って行かれました。

服部公一氏略歴

一九三三年山形市に生まれる。山形東高校より学習院大学文学部に学ぶ。作曲を中田喜直氏に師事。六四年アメリカに留学し、ミシガン州立大学を中心に地域社会の音楽を研究。現在、作曲家、音楽評論家として活躍

作品 ピアノ協奏曲・合唱曲集「朝の市場」・童謡曲集「おじさんの子守歌」ほか多数。

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張と実際」より（六）

第十　各地への伝播

池田の呉服の森に開かれた家なき幼稚園がともかくも一年の経過をとるうちに、春から夏、秋から冬、それからお正月も野の中で経過して、大正十二年の春へはいりました。その当時の私どもの心の勇躍はとても想像することのできないほど血の気に満ちたものでした。その三月に有志の人たちが集まってどうしても絵馬堂のような不便なものばかりにたよらずに、小さくても独立した専有の家を造りたいといい出されました。

「家」早くも大人は家なしにいられないことを露骨に明示してきたものであると私は微苦笑を禁じ得なかったのでありますが、池田神社の絵馬堂が危ないまでにかたむいているのを見ますと、またそのままに捨てて置かれない心持ちにせかされましてついに有志の協力によって今の小さな建物が森の陰にできあがりました。

それでも園舎などとはいわないで「幼児集合所」という名にして、子どもの集まるためのもの、雨の日や特別な悪天候のための用を満たす家で決してこの家が幼稚園ではないということを人々に意識させることをつとめてまいりました。

がこうして建物もでき、一年の経過もとってまいりますと、さすがに進歩した人たちの集まっている新市街地の風評は意外に喜ばれてきたものと見えまして、ほど近い土地の有志者が、おいおいに訪ねてきて、そこにもここにもとこの自然の子どもの国の建設を熱望された結果、次のようにおいおいとできることになりました。

宝塚家なき幼稚園（大正十三年二月）

箕面家なき幼稚園（大正十三年六月）

十三家なき幼稚園（大正十三年五月）
雲雀丘家なき幼稚園（大正十三年十二月）
千里山家なき幼稚園（大正十四年二月）

ほんとに大正の年代は、私にとっての大切な子どもの国の建設時代だともいえる時でおそらく一生を通じての最も愉快な意義ある年として記念すべきであると思っています。

各地の園の特色

このようにしてできていく六つの幼稚園にそれぞれ風致上の特色と環境としての特徴とがあります。それをそれぞれに発揮させ、互いに相反映させることを私は心の奥に楽しみました。

お宮の幼稚園（池田）
川の幼稚園（宝塚）
山の幼稚園（箕面、千里山）
新開地の幼稚園（十三）
富区の幼稚園（雲雀丘）

神社を中心とした池田の森にはまことに神妙な心持ちを培うような静けさが深い木陰につつまれています。

清い武庫川の流れが愛の松原と名づくる古松の丘を巡って豊かに流れている宝塚には他にくらぶることのできない涼しさと明るさがあります。

箕面の幼稚園にはその裏からすぐに何里も奥へ続いているような松山を園のものとして、幼児に独占させているような自然のめぐまれがあります。

雲雀丘には香港ピークに見るような住宅美をもった丘陵を後ろに負い前に太古民族の遺跡だという加茂の丘を見おろしているような一望の広さがあります。

千里山にはまた千里山特有の丘陵美をもって満たされています。

さらに、十三には大阪市の北によった大都市の末梢部という地形があってそこにその中の幼児の群を扶養する特有の色彩があります。

この各々の園の先生たちが、時々入れ変わって各地に助勤する案をたてたり、また各地の若き女性たちが時々集合して意見を交換したり懇親を結んだりするような会合を催したり各地の長短を親類同志、姉妹同志の間で研究しあう自由をもっていることをも、また私は喜んでまいりました。

以上各地で開園のたびに、また新学期のたびに、配布する簡単なすり物はいずれも同じ形式で左のようなものです。

大自然のなかで
幼児の身と心とを
伸びるだけ伸ばそうとするのが我園の主張です。

□子どもを無邪気に　□子どもを神妙に　□子どもを快活に
□子どもを丈夫に
これが我園の希望です。

□若い優しい先生がお友だちになって
□子どもの真純な相互生活を営ませたい
これが我園の方針です。

定員が満たないうちにお望みの方は御申込み下さい。三歳以上の御子たちならよろしい。

入園料　金三円　月謝　金三円

池田家なき幼稚園

事務所（室町七番町橋詰方 電話池田二六六番）

幼児集合所（呉服神社表門外）

園長　橋詰　良一　　囑託　サーレーアレキサンダー
保母　西川　治子　　園医　谷軍　治郎
同　岡村　栄子　　委員　木村源三郎
浅野　静子　　同　北上　惣七
葛野　宣子　　新銀巳之助
川田富久子　　竹林　虎一
（以上就任順）　　山口伊之助

（大正十四年のものです）

第十一　保育の内容

さて、私の子どもの国「家なき幼稚園」の幼児生活がどんな模様にして営まれておりますか、すなわち私の園の保育内容がはたしてどんなものであろうか、それが一番人々の聞いてみたいと思わるる主要点であろうと思われますが、実際はそれがすこぶる簡易に、なだらかに、手数のいらぬようにして、自然に営まれていることが聞いていただきたい重要な点でもあります。

保育の時間は

保育の時間は、時季によって幾度でも変更しますが、大体冬は

午前十時から午後二時頃まで、夏は午前九時から午後一時頃まで、そして春秋の野の幼稚園シーズンには午前九時から時によると午後の三時頃までも遊び回ることがあります。

もっともこの保育時間は普通の幼稚園に準拠していくらかを伸縮したにすぎませんが、一口に言えば、もっと長くしても短くしても子どもの状態に応じて行けば、一向に差支えないものだと信じられます。またわが園では少しもそんなことに拘泥してはいません。

時間はどう移ったか

一日のうちの遊戯や作業やその他のことをどんな時間に配当してあるか、などと問われることがたびたびありますが時間割などもとより作っていないことは、もちろん子どもの興味の連続しているかぎりはなるべくあることを継続させる代りに興味がなくなればいつでも他へ転換するにちゅうちょしないのですからどんなものがどれ位続くやら、またそれが日によってどう変わるやら予測することはできません。

けれども実際の経過を日記に書きとめるだけは鄭重にしてありますから後になってこれを見ると、いくらかまとまった課程表のようなものがながめられます。

課目の予定は

「明日の心つもり」という簡単な名目で、左のような予定が、どの園の娘たちの手でもつくられます。この園の特色は晴の日と雨の日との心つもりをいつでもしていなければならぬことでそれだけを書きつけておきます。

月　日	曜日
（晴）	（雨）
回遊（裏のお山から滝へ）	蓄音機
お弁当	自由画
おはなし	

こんな心づもりのように（また臨時に変更して）させて行きますが、それも全体の子どもが一様に何時から何時までしていったというのではなく、ある子どもは甲の先生の介錯（しゃく）である時間まで続けているが、ある子どもは乙の先生の介錯でとうに他の仕事に転換しているというありさまですから、記録にも大方この辺に一致するであろうと思わるる時間を標準として記入してあるにすぎないものも多いのです。

したがって後日にその記録を見ても確実な時間を推想する資料となるものもありますけれども多くは概要の時間を想見するにた

りるまでのものです。

ただし、この全体の生活がどんな形に営まれているかを大観する鳥瞰図としては相応に興味のある資料だとも思いますからここに違った三園の二月、七月、十月の表を並べてみました。

各園各様に

この三つは、お宮の幼稚園、山の幼稚園、川の幼稚園というように地形も状況も違っていますのでこの生活鳥瞰図をくらべて下さいましたら、おのずから各様の特色が見ていただけるとも思われます。また各園の保母の好むところにしたがって多少の趣を異にする自由をもっていることも見ていただけると思います。

もっともその鳥瞰図を選り出した時季はわざと違う年にしていらくかこの園の全体の推移を縦に眺めてもらうことのできるようにとも考えたのであります。

池田家なき幼稚園

昭和二年七月分		椅子取	お遊戯お唱歌	自由遊	回遊	おはなし	英語（ミスアレキサンダー）	手技	粘土細工
1	晴	時分 1.00	1.00	0.40					
2	晴				1.30	廻りま 0.50			
3	晴			1.00			0.40	0.15	0.30
5	晴			1.00					0.30
6	曇		0.30	1.00					
7	曇		0.20	0.30					
8	晴		0.20	0.30				0.40	
9	晴			1.00			0.20	0.20	
10	晴	0.15		0.40					0.30
12	曇		1.00		0.30				
13	晴			0.30					
14	晴		0.40	1.00				0.30	
15	晴		0.40			0.40			
16	晴			0.40					1.00
17	晴		1.00	0.40				0.30	
19	曇		1.00	0.20		0.20			
22	晴			1.00			0.20	0.30	
23	曇			0.20	1.00				
24	雨		0.20	1.00		0.20		0.15	
26	曇	0.30	0.20						1.00
27	晴			0.40	1.00	0.30			
24	晴		1.00						
29	曇			1.00					
31	晴		0.30	0.40					
平均		0.35	0.40	0.44	0.00	0.32	0.27	0.26	0.42

箕面家なき幼稚園

大正十四年七月分		積木	唱歌遊戯	自由遊ビ	回遊	合計	バスケットボール	銀貨廻し	動物園ごっこ	シャボン玉	蓄音機	ボート遊	スプーンレース	スキップ
1	雨	時分 0.30	0.50	0.20		2.40								
2	晴		0.30		0.50	2.20								
3	晴		0.15	0.25		2.25								
4	晴		0.20	0.45		1.55								0.25
6	雨		0.20	0.40		2.10							0.40	
8	晴	0.50	0.30		1.15	2.00					0.30	0.40		
9	曇		0.30	0.30		1.45				0.15				
10	晴			1.10		2.10								0.30
11	晴				2.15	2.15			0.40	0.10				
13	晴	1.15	1.00		1.15	2.00					0.30			
14	曇		0.30	0.30		2.00	0.30	0.40				0.20		
15	晴		0.40			2.10								
16	晴		0.55	1.00		2.20		0.40				0.20		
17	晴		0.15	0.20	1.25	2.10			0.30					
18	晴		0.20	0.30		2.10								
20	晴		0.25	0.30	1.10	1.55				5.15				
21	晴		0.15	0.20	1.55	1.50								
22	晴		0.20	0.40		1.45					0.10	0.15		
23	晴		0.20	0.55		1.55							0.35	
24	晴		0.15	0.15		1.50								
25	晴		0.15	0.30	1.35	2.10								
27	晴		1.00			1.00								
28	晴	1.00	1.00	0.30		2.15		0.40						
29	晴			1.00	2.30	1.55	0.15							0.30
31	晴		0.25	1.20	2.15		0.23	0.40	0.53	0.31	0.32	0.24	0.38	0.28
平均		0.54	0.31	3.35	1.38									

宝塚家なき幼稚園

昭和二年七月分		お遊戯	自由遊戯	自由画	水泳	おひるね	お弁当自由遊戯	合計	山上り	水鉄砲	スベリッコ	ハンモック	製作画キ方	童話
		時分												
1	雨		1.10				0.50	1.40						
2	晴		1.20	0.30			0.50	2.30				0.55		0.15
4	晴		1.20				1.00	2.35		1.30			0.25	
5	雨	0.40	1.00				1.00	2.25			1.00		0.20	
6	晴		1.00	0.40			1.00	2.00			0.40			0.20
7	雨	0.30	1.20				1.00	3.45			1.10			
8	曇		0.30				0.50	2.20	0.50					0.30
9	晴	0.25	0.50				1.30	1.30						0.20
11	晴		1.10	0.30			2.15	2.15						
12	晴		1.00				2.30	2.30						
13	晴	0.25	1.25				1.00	1.00						
14	晴		1.10				2.30	2.30						
15	晴		0.30			0.30	2.20	2.20				1.50	0.25	
16	晴		1.00	0.20			3.45	3.45						0.15
18	晴		1.00			0.35	1.50	1.50				1.30		
19	晴	0.30			0.40		3.20	3.20				1.00		0.15
20	晴	0.35	0.40				4.10	4.10				1.00	0.40	
22	晴		1.00		0.30		1.00	1.00				1.00		
23	晴		0.30		0.30		2.25	2.25	1.10					
24	晴	0.20	0.40	0.30			1.55	1.55			0.55			0.30
26	晴	0.20	A.30 B.30		0.30		3.10	3.10					0.25	0.25
27	晴				0.50		2.30	2.30						
28	晴	0.45		0.20	0.45		2.30	2.30				1.30		
29	晴		1.00				3.30	3.30						
30	晴		0.30		0.50		0.40	0.40				0.50	0.50	
平均		0.30	0.55	0.28	0.84	0.33	0.45		1.00	1.30	0.56	1.12	0.30	0.21

合計	メンタルテスト	はなし方	積木	おうた	童話	手技	い競争遊戯すとり	回遊
3.10						0.40	0.30	
2.50					1.10			
2.50					0.30			
3.10							0.30	
3.10				0.30				
3.15							0.25	
3.00			1..0				0.30	
2.20				0.25				
2.20		0.40						
2.30					0.25		0.40	
2.20	0.25					0.30		
2.10				0.30			0.30	
2.30			0.30					
2.10								0.50
1.50							0.30	
1.54		0.20						
1.54						0.30		
2.00							0.30	
1.50				0.50				
2.10				0.40				
1.50								
1.50			1.00					
1.50								
1.30				0.10		0.20		
1.50							0.30	
	0.25	0.30	1.13	0.30	0.22	0.30	0.31	0.50

注　紙面の都合により二月・十月のものははぶきました。

つぎに、池田家なき幼稚園の一年間の保育鳥瞰図（大正十二年）が一月から十二月までこまかく掲載されています。これもはぶきますが、これによりますと回遊の時間の多いことがよくわかります。

以上は大正十二年という家なき幼稚園の最もなまなましい時代です。

先生たちも闇のなかを手さぐりで行くような心持ちであったと思いますが、それだけ純真で自由で、時間の推移にも、種目の配置にも自然さがあるとおもいます。

ただし毎日この順序で行われたものではなく、朝くるなり回遊になるかとおもうと、回遊の途中から帰ったのもあります。

ただこの日には何をどれくらいしたかと見る参考ぐらいのものです。

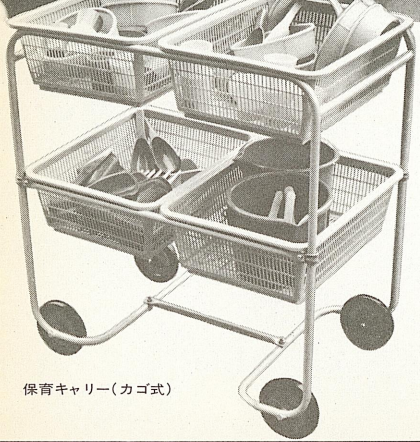
時間も日記から書きとってもらった（若い先生に）のですが、決してこんなにキッチリしていません。おおよそのところを書き止めたことは前にもいった通りです。

ほんとに子どもの国を鳥瞰するだけの資料ではありますが、漠然とした中にも何物かを映出するに足りないでしょうか。

（この項つづく）

幼児の教育　第七十三巻　第八号
八月号　©　定価一七〇円
昭和四十九年七月二十五日印刷
昭和四十九年八月　一　日発行
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

砂場あそびは
子どもの心を育てます



保育キャリー（カゴ式）

キンダー砂場セット新型

1セット　14,000円

〈1セット内容〉

砂　型（黄・緑）…20コ　　フルイ（ピンク）…10コ
バケツ（赤）…4コ　　シャベル（赤・青）…40コ
整理用カゴ（黄）…2コ

遊びをより一層楽しいものにします

保育キャリー（カゴ式）

13,400円

フレーム（クリーム）一式　カゴ（水）4　棚棒2
止め具4　●高さ75cm　巾44cm　長さ71cm

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課　TEL　東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

フレーベル館の運動会用品

・ファニートンネル	13,000円	・キンダーサッカーボール 1セット(3個)	3,800円	・大玉 (紅白)	14,400円
・ドッキングなわとび	240円	・キンダーカラーボール(大)	500円	・大玉 空気入	3,000円
・キンダーカラーマット (各色1枚)	17,500円	〃 (中)	420円	・万国旗 一組(20枚)	4,000円
・キンダースクェアーマット	35,000円	〃 (小)	140円	・等賞旗 一組(1～5等)	2,500円
・キンダーマット(A)	14,500円	・キンダーエッグボール	750円	・紅白旗 一組(2枚)	250円
・キンダー平均台シーソー	21,000円	・キンダーとびばこ(A)	22,000円	・紅白帽子	220円
・平均台	10,000円	・キンダーとびばこ(B)	15,000円	・旗立台	1,600円
・キンダー6色円筒 1セット(6本)	10,000円	・とび板	4,500円	・巻尺	2,400円
・キンダー6色バトン 1セット(6本)	1,300円	・バスケット台 1セット(2台)	15,000円	・綱引ロープ	19,000円
・キンダードッジボール 1セット(6個)	5,600円	・ネット(バスケット台用)	1,500円	・ライン引	5,200円

・くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。